

前原地区遺跡群

I

福岡県糸島郡前原町大字前原通称寺浦所在の遺跡

前原町文化財調査報告書

第 28 集

1988

前原町教育委員会

前原地区遺跡群

I

福岡県糸島郡前原町大字前原通称寺浦所在の遺跡

前原町文化財調査報告書

第 28 集



例 言

1. 本書は、福岡県糸島郡前原町大字前原 475 番地の 2 地内において、高層分譲住宅建設工事に先がけて行なった埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査ならびに整理業務は、日特不動産株式会社（東京都中央区銀座 8 丁目 14 番 14 号、代表取締役小塩隆二）からの委託を受けて、前原町教育委員会が実施した。
3. 調査ならびに整理は、昭和 62 年 10 月 13 日から翌年 3 月 31 日にかけて実施した。
4. 遺構実測は、岡部裕俊・岡田りつ子・柏田睦子・中峰幸枝・東司まち子・山崎喜美子・中尾嘉孝で分担し、整図は岡部と池田千春が行った。
5. 遺構写真撮影は、岡部が担当したが、遺跡全景写真撮影については空中写真稲富に委託した。
6. 遺物実測は、岡部・角浩行・古川秀幸・久山高史が行い、製図は岡部が行った。
7. 遺物写真撮影は岡部が行ったが、向原遺跡出土遺物の撮影は岡紀久夫が行った。
8. 土器実測図のアミカケ部は研磨による暗文施文部位を表している。
9. 遺構実測図断面の粗アミカケ部は、攪乱により欠失した部位を推定復元したもので、遺構配置図中のアミカケ部は攪乱部を表したものである。
10. 本書の執筆編集は岡部があたった。

序

福岡市のベッドタウンとして未来に向け着実な進歩の道を歩む前原町。そのもう一つの顔は、古代史へのロマンを誘う古代伊都国の中心地——多く文化財がねむり続ける歴史の宝庫——であります。

前原地区にも、多くの文化財がねむっていることは以前から衆目の知るところであります。今回の寺浦遺跡の発掘調査はそれを裏付ける貴重な資料、成果をもたらすこととなりました。本書に報告されたこれらの資料が、考古学研究の分野で、また埋蔵文化財保護活動の理解を深めるための資料として、広く活用されることを願ってやみません。

なお発掘調査に際し暖かい御理解、御協力をいただいた日特不動産株式会社ならびに日特建設株式会社関係者各位・地元の方々に対し深く感謝する次第です。

昭和 63 年 3 月 31 日

前原町教育委員会

教 育 長 河 原 吉 美

本文目次

	頁
I はじめに	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 発掘調査の組織	2
II 遺跡の位置と環境	4
III 調査の記録	8
1. 調査地区の設定	8
2. 調査地点の概要	8
3. 調査内容	10
(1) 竪穴住居跡	10
1号住居跡 2号住居跡 3号住居跡 4号住居跡 5号住居跡	
6号住居跡	
(2) 掘立柱建物	15
1号掘立柱建物 2号掘立柱建物 3号掘立柱建物 4号掘立柱建物	
(3) 土 壙	26
1号土壙 2号土壙	
(4) 溝	28
1号溝 2号溝 3号溝 4号溝 5号溝 6号溝 7号溝 8号溝	
(5) 出土遺物補遺	28
IV まとめ.....	30
付 載 前原町向原遺跡出土遺物について	31
1. 遺跡の立地	31
2. 遺跡破壊の経過	32
3. 出土遺物について	34

図版目次

- 図版 1 a. 寺浦遺跡調査区全景（上から）
b. 同上（北東から）
- 図版 2 a. 寺浦遺跡調査区近景（上から）
b. 調査区北側近景（上から）
- 図版 3 a. 1号住居跡
b. 2号住居跡
- 図版 4 a. 3号住居跡
b. 4号住居跡
- 図版 5 a. 1号掘立柱建物
b. 1号掘立柱建物柱穴内土器出土状況（柱穴1）
- 図版 6 a. 1号掘立柱建物柱穴内土器出土状況（柱穴4）
b. 柱穴55土器出土状況
- 図版 7 a. 2号掘立柱建物（北から）
b. 2号掘立柱建物土壇土器出土状況（北から）
- 図版 8 a. 溝1
b. 溝1土層断面
- 図版 9 寺浦遺跡出土遺物1（柱穴内出土土器）
- 図版10 出土遺物2
- 図版11 a. 向原遺跡出土素環頭大刀
b. 同 土師器甕棺下甕

挿 図 目 次

	頁
第1図	前原地区市街地近景（南西上空から）……………1
第2図	寺浦遺跡の位置と周辺の主な弥生時代遺跡（1/75,000）……………3
第3図	寺浦遺跡出土打製石鏃実測図（3/4）……………5
第4図	篠原新建遺跡調査風景……………6
第5図	伏龍遺跡調査地点遠景（北から）……………6
第6図	前原地区内の遺跡既調査地点（1/5,000）……………7
第7図	寺浦遺跡調査区表土除去後現況図（1/300）……………9
第8図	1号住居跡実測図（1/60）……………10
第9図	1号住居跡出土土器実測図（1/4）……………11
第10図	2号住居跡実測図（1/60）……………11
第11図	2・3号住居跡出土土器実測図（1/4）土製紡錘車・石器実測図（1/2）……………12
第12図	3号住居跡実測図（1/60）……………12
第13図	4号住居跡実測図（1/60）……………13
第14図	5号住居跡実測図（1/60）……………13
第15図	6号住居跡実測図（1/60）……………14
第16図	1号掘立柱建物実測図（1/60）……………15
第17図	1号掘立柱建物柱穴土器出土状況（1/30）……………16
第18図	1号掘立柱建物柱穴1出土土器実測図（1/4）……………17
第19図	1号掘立柱建物柱穴2・3・4出土土器実測図（1/4）……………18
第20図	1号掘立柱建物柱間接合土器実測図（1/4）……………19
第21図	柱穴55土器出土状況（1/30）……………21
第22図	柱穴55・70出土土器実測図（1/4）……………21
第23図	2号掘立柱建物実測図（1/60）……………22
第24図	2号掘立柱建物土壙土器出土状況（1/60）……………22
第25図	3号掘立柱建物・2号柱穴列実測図（1/60）……………23
第26図	4号掘立柱建物実測図（1/60）……………24
第27図	1号柱穴列実測図（1/60）……………24
第28図	1号土壙実測図（1/60）……………25
第29図	1号土壙出土土器実測図（1/4）……………25
第30図	1号土壙土石器実測図（1/2）……………26

第31図	2号土壙実測図 (1/60)	27
第32図	柱穴他出土遺物実測図 (3/4, 1/2, 1/4)	29
第33図	向原遺跡および周辺遺跡位置図 (昭和59年頃) (1/5,000)	31
第34図	向原遺跡甕棺墓出土状況図 (右・1/60) と1号甕棺墓出土状況復元図 (左・1/30)	32
第35図	向原遺跡出土遺物実測図 (1/6)	33

表目次

第1表	寺浦遺跡出土石鏃観察表	4
第2表	住居跡出土土器観察表	14
第3表	掘立柱建物他柱穴出土土器観察表	21・22

付 図

寺浦遺跡調査地区遺構配置図

I はじめに

1. 調査にいたる経過

近年における人口の都市集中化傾向は福岡都市圏においても例外ではなく、福岡市郊外および近接する市町村では、着実に人口増加・農林地の宅地化が進行している。

福岡市に隣接する糸島地方、とりわけ前原町ではJ R九州筑肥線の電化・増便、国道202号線今宿バイパスの西部伸長等による交通手段の利便化に加え、緑豊かな自然環境をキャッチフレーズにした商業ベース主体の新規住宅建設・供給が進められている。

前原地区においても、筑前前原駅を中心に据えた都市再開発事業が官民連動して推進されており、一昔前とは街の様子も大きく変様をとげた。今後さらに建造物の新改築・高層大型化が助長されることとなろう。

今回調査を実施した寺浦遺跡は、前原駅の南に近接する高台で、晴れた日には眼下に広がる町の繁華街遠くは福岡市と境を接する高祖山 能古島の浮かぶ博多湾まで一望でき、西に桜の名所として知られる笹山公園をひかえる景勝の地である。

以前この地には前原町立の老人ホームが建つ町有地であったが、1980年に当地から500m南方に移転したため、東に面する寺浦池とともに、現在の土地所有者である日特不動産株式会社に売却された。1987年9月に所有者から高層分譲住宅建設が計画されている旨の連絡を受けたが当地が周知の埋蔵文化財包蔵地寺浦遺跡群の中心部に位置しているため、関係者立会のもとに

試掘調査を実施した。その結果地表下約1mから弥生時代中期の土器片住居跡柱穴等を確認した。

前原町教育委員会では、この結果をもとに、至急、日特不動産株式会社、施行主の日特建設



第1図 前原地区市街地近景（南西上空から）

株式会社関係者と数度にわたる協議を行い、今調査への協力を依頼したところ、快諾を得たため、10月13日から1カ月余りにわたり調査を実施し、ここにその報告をまとめることができた。

調査報告書を刊行するにあたって、発掘調査事業への暖かい御援助をいただいた日特不動産株式会社、日特建設株式会社関係各位に心から謝意を表わす次第である。

2. 発掘調査の組織

発掘調査の進行、および発掘調査報告書の作成に従事した組織の構成は以下に記すとおりである。

調査主体 前原町教育委員会

調査担当 同 社会教育課文化係

総括 教育長 河原吉美

社会教育課長 井上 尚

同 文化係長 吉村耕治

庶務 同 社会教育係長 矢野豊秋

主事 久保静代

調査 同 文化係主事 岡部裕俊

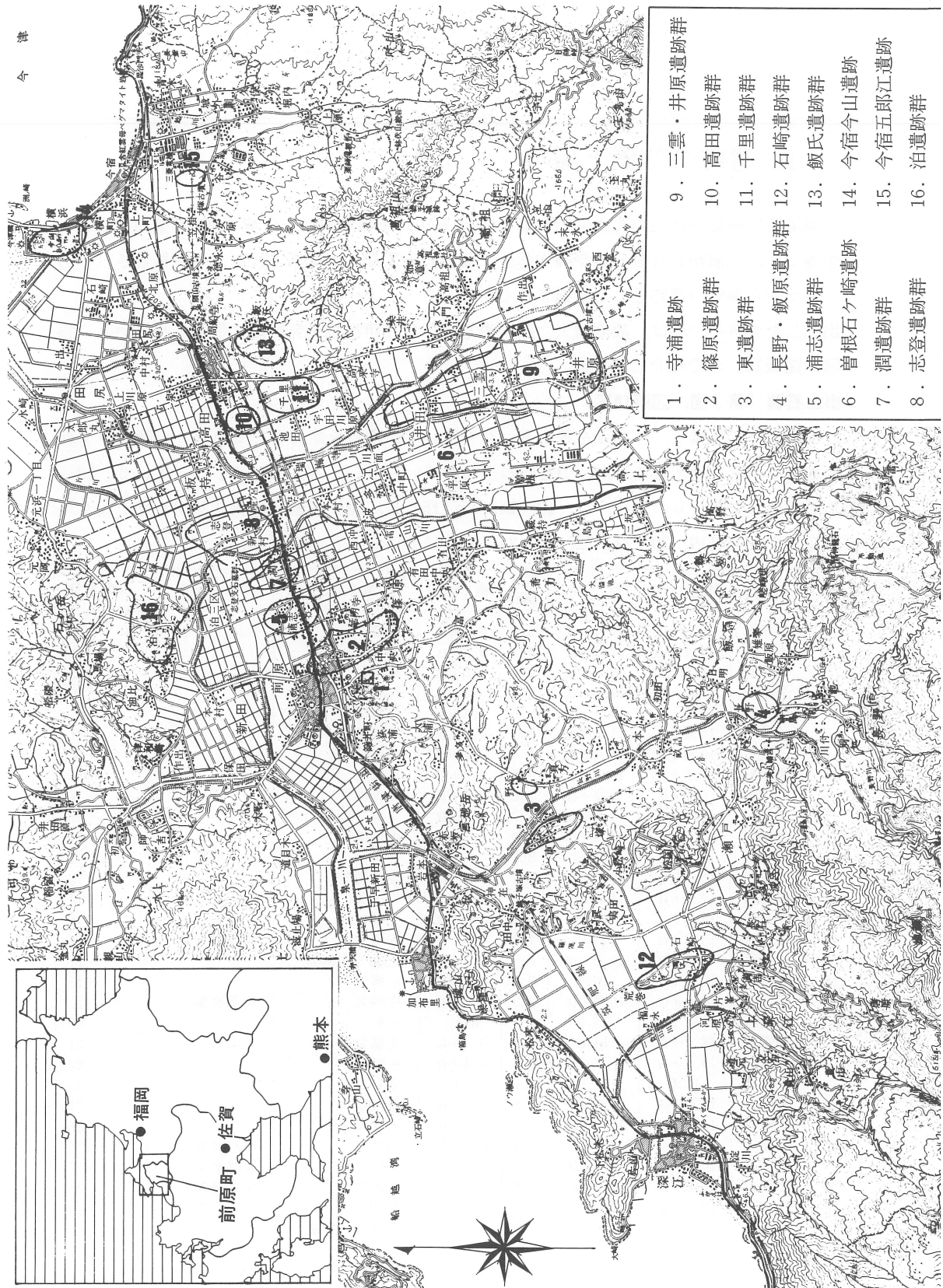
調査・整理補助 中尾嘉孝（九州産業大学） 古川秀幸・久山高史（奈良大学）

池田千春

調査・整理作業 原野アサ子 青木輝代 平山富士子 柏田睦子 岡田りつ子 中峰

幸枝 竹原ひとみ 東司まち子 入江里子 井上ハルエ 東司テル子 高橋タケ子 長田

浜子 川上日出子 山崎喜美子 金田しず子 青木キクエ 園田慶子



第2図 寺浦遺跡の位置と周辺の主な弥生時代遺跡 (1/75,000)

II 遺跡の位置と環境

寺浦遺跡は糸島扇状地の北西部、標高76.4mの笹山の東裾暖斜面に位置する。調査地の周辺の田畑等では、以前から打製石器や縄文弥生土器、石包丁などが採集されたことが報告されており、早くから周知の遺跡として注視されていた。

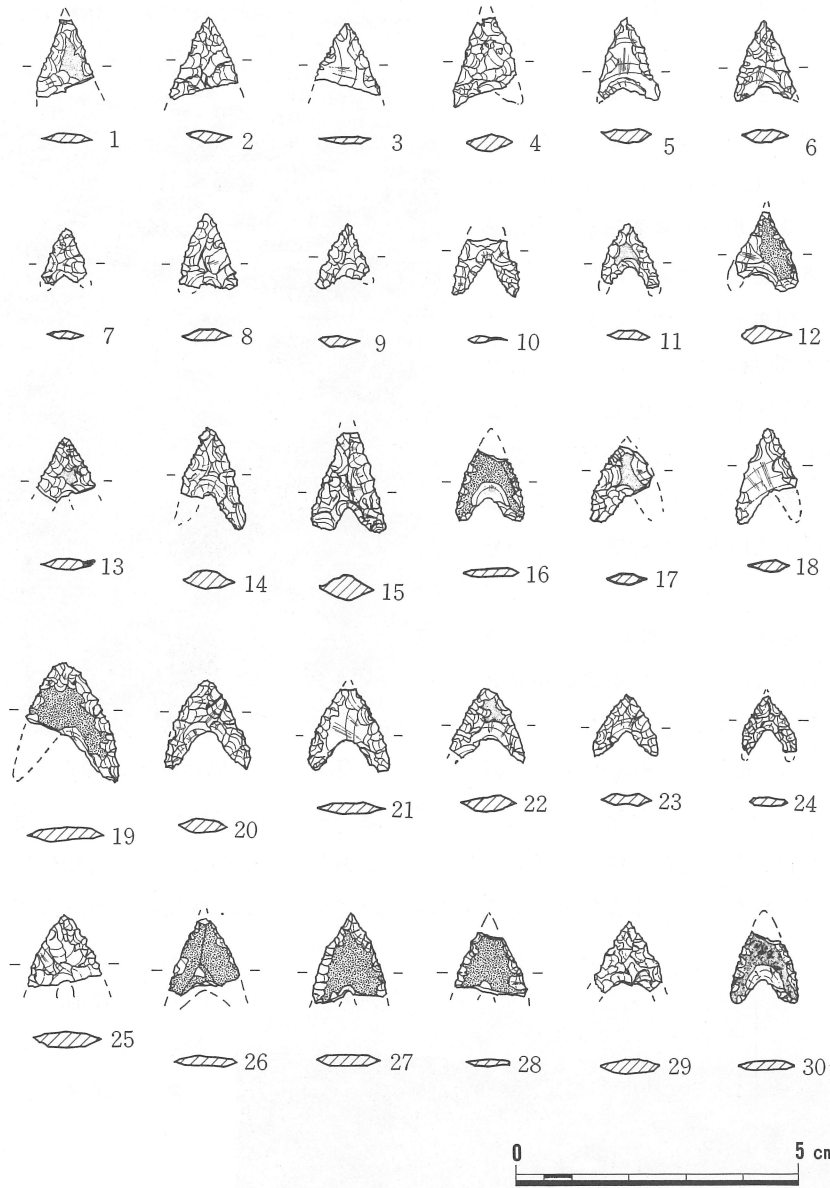
註1

出土した資料の一部は、故原田大六氏の手を経て現在伊都歴史資料館に保管されている（第3図、図版10）ので紹介しておく。

出土石器（第3図、図版10下）

いずれも打製石鏃で、計30点を数える。30を除いて黒曜石を素材としている。形態はいずれも凹基鏃であると考えられるが、①基部の挟りが浅いもの（1, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 29）③基部の挟りが深いもの（10, 11, 12, 14, 15, 16, 17, 18）③基部の挟りが深く脚が長く外に張り出すもの（19, 20, 21, 22, 23, 24, 30）に分けることができる。

番号	石材	長さ(mm)	幅 (mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	遺存状況	備考	図版番号
1	黒曜石	14.5+α	10.2+α	2.1	0.2+α	脚部欠		10下-1
2	黒曜石	14.1+α	12.2+α	2.2	0.3+α	脚部欠		" -2
3	黒曜石	12.5+α	12.0+α	1.5	0.2+α	脚部欠		" -3
4	黒曜石	16.1+α	11.3+α	3.1	0.5+α	片脚欠		" -4
5	黒曜石	14.3+α	11.1+α	2.9	0.4+α	片脚端欠		" -5
6	黒曜石	14.1+α	11.0+α	2.7	0.3+α	片脚端欠		" -6
7	黒曜石	10.0+α	8.4+α	1.6	0.1+α	片脚欠		" -7
8	黒曜石	13.6+α	10.5+α	2.1	0.3+α	片脚欠		" -8
9	黒曜石	10.6+α	9.7+α	1.8	0.2+α	片脚端欠		" -9
10	黒曜石	10.1+α	12.0+α	1.2	0.2+α	先端欠		" -10
11	黒曜石	11.2+α	10.5+α	2.0	0.2+α	両脚端欠		" -11
12	黒曜石	14.0+α	11.1+α	3.1	0.3+α	片脚欠	局部磨製	" -12
13	黒曜石	11.2+α	10.5+α	2.1	0.2+α	両脚端欠		" -13
14	黒曜石	17.9+α	11.8+α	3.5	0.4+α	片脚欠		" -14
15	黒曜石	17.8+α	13.6	4.8	0.6+α	先端欠		" -15
16	黒曜石	13.8+α	12.1	1.8	0.3+α	先端欠	局部磨製	" -16
17	黒曜石	13.5+α	11.0+α	2.1	0.3+α	先端・片脚欠		" -17
18	黒曜石	16.7+α	10.9	2.5	0.3+α	片脚欠		" -18
19	黒曜石	20.9+α	16.4+α	2.9	0.7+α	片脚欠	局部磨製	" -19
20	黒曜石	15.9	15.2	2.9	0.4	完形		" -20
21	黒曜石	14.7+α	14.8	2.1	0.3+α	先端欠		" -21
22	黒曜石	14.1+α	13.2	3.1	0.4+α	片脚欠		" -22
23	黒曜石	11.0	12.9	2.0	0.3	完形		" -23
24	黒曜石	10.0+α	9.9	1.8	0.1+α	両脚端欠		" -24
25	黒曜石	12.5+α	13.1+α	3.0	0.4+α	両脚欠		" -25
26	黒曜石	13.1+α	12.9+α	2.1	0.3+α	脚部欠	局部磨製	" -26
27	黒曜石	16.2+α	13.5+α	2.2	0.5+α	両脚欠	局部磨製	" -27
28	黒曜石	11.2+α	13.0+α	1.9	0.3+α	両脚欠	局部磨製	" -28
29	黒曜石	12.5+α	12.0+α	2.2	0.3+α	両脚欠	磨耗が著しい	" -29
30	硅岩	17.8+α	11.7+α	2.9	0.6+α	片脚端・先端欠		" -30



第3図 寺浦遺跡出土打製石鏃実測図 (3/4)(太アミは局部磨製・薄アミは未加工部位を示す)

12, 16, 26~28は言わゆる局部磨製の石鏃で、26~28は脚部を欠失しているものの、19を含め長脚が大きく開いた形態であったものと思われる。

遺存状況は、先端部を欠失するものが12点、基部を欠失するものが22点を占めており、完形品はわずか20, 23の2点のみである。

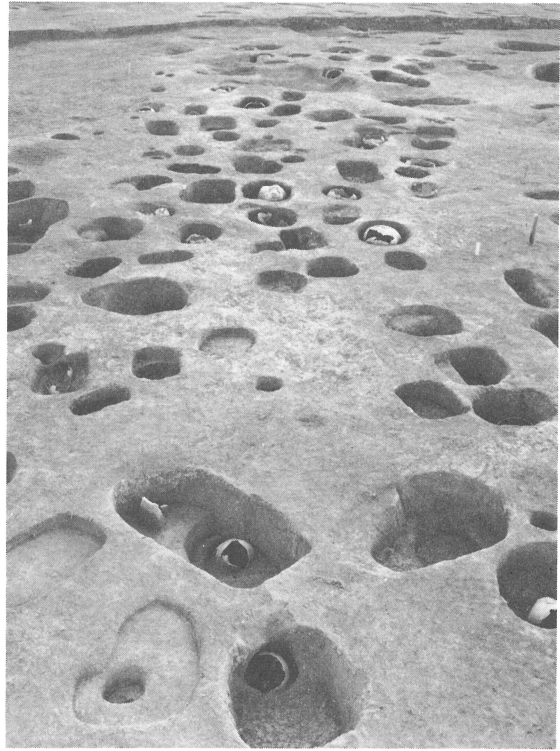
時期の特定はしかねるが、形態および調整技法の精巧さから、縄文時代の資料と考えられる。

寺浦遺跡の東には、南北に長く伸びる谷地を隔てて篠原新建遺跡がある。前原町立前原南小学校の建設工事に先がけ、昭和55年度と昭和57年度の2次にわたる調査が実施され、中期初頭～前半を主体とした甕棺墓65基、土壙墓76基、木棺墓6基、土壙41基等が確認されている。

調査地の南東に谷地の北^{註2}をせきとめて築いた伏龍池の南西小丘陵上には、伏龍遺跡^{ふくりゅう}が位置する。前原町立老人ホームの移転新築工事に伴い昭和55年度に調査を実施した際に、弥生時代後期の甕棺墓2基、古墳時代前期の方形墳2基等が発見された。

篠原新建遺跡の北東500mには、弥生時代から古墳時代にかけての墳墓群が発見された向原遺跡^{むかえぼる}がある。この遺跡は原田大六氏によって前原町上町遺跡^{かんまち}として紹介されたことがあり、また渡辺正気氏によって当地の弥生～古墳時代にかけての甕棺墓2基の調査成果を含む周辺遺跡の概要が紹介されたことがあるが、このように、周知化される以前に遺跡の大半は数度にわたる大規模な造成工事を受けていたため、壊滅寸前の状況であった。

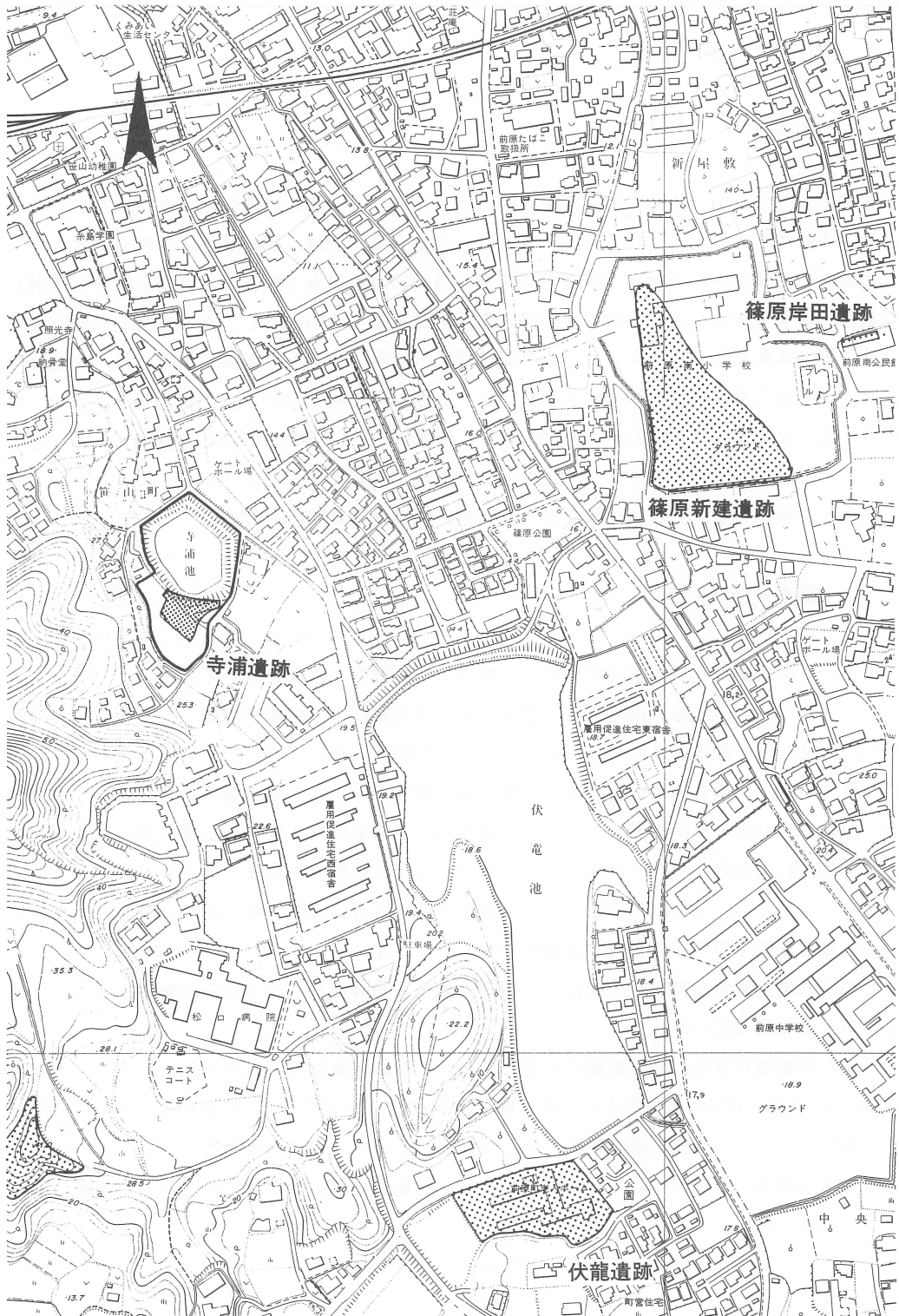
昭和60年度に、町立伊都文化会館の建設工事に伴う発掘調査によって 弥生中期の甕棺墓、木棺墓、石蓋土壙墓等が発見されている。



第4図 篠原新建遺跡調査風景



第5図 伏龍遺跡調査地点遠景（北から）



第6図 前原地区内の遺跡既調査地点 (1/5,000)

Ⅲ 調査の記録

1. 調査地区の設定

住宅建設にともなう造成工事は、第6図に示した通り、寺浦池に南側空地を含めた計7000㎡にのぼる計画であった。しかし、第1章で述べたように、空地は昭和55年まで町立の老人ホーム敷地として使用されており、試掘調査結果と当時の工事担当へ聞き込み調査を総合し検討した結果、まず老人ホームの建設工事の際に南西斜面を2～3m掘削し、その残土で北側を埋め立てて用地造成を行っていること、また池は既に旧地表から1～5m掘り下げられ、文化財の遺存する可能性も薄いことが指摘された。よって調査地区を、空地の北東部約600㎡に限定して調査することとなった。表土剥ぎは、造成による盛土の深さが最深2.5mに達するため、大型のバックホーとブルドーザを併用して行なったが土量が当初の予想を大きく上まわったため、西側調査区を狭めざるをえない結果となった。最終調査面積は510㎡である。

2. 調査地点概要

寺浦地区の埋蔵文化財の態様については昨今まで不鮮明な状況が続いていた。

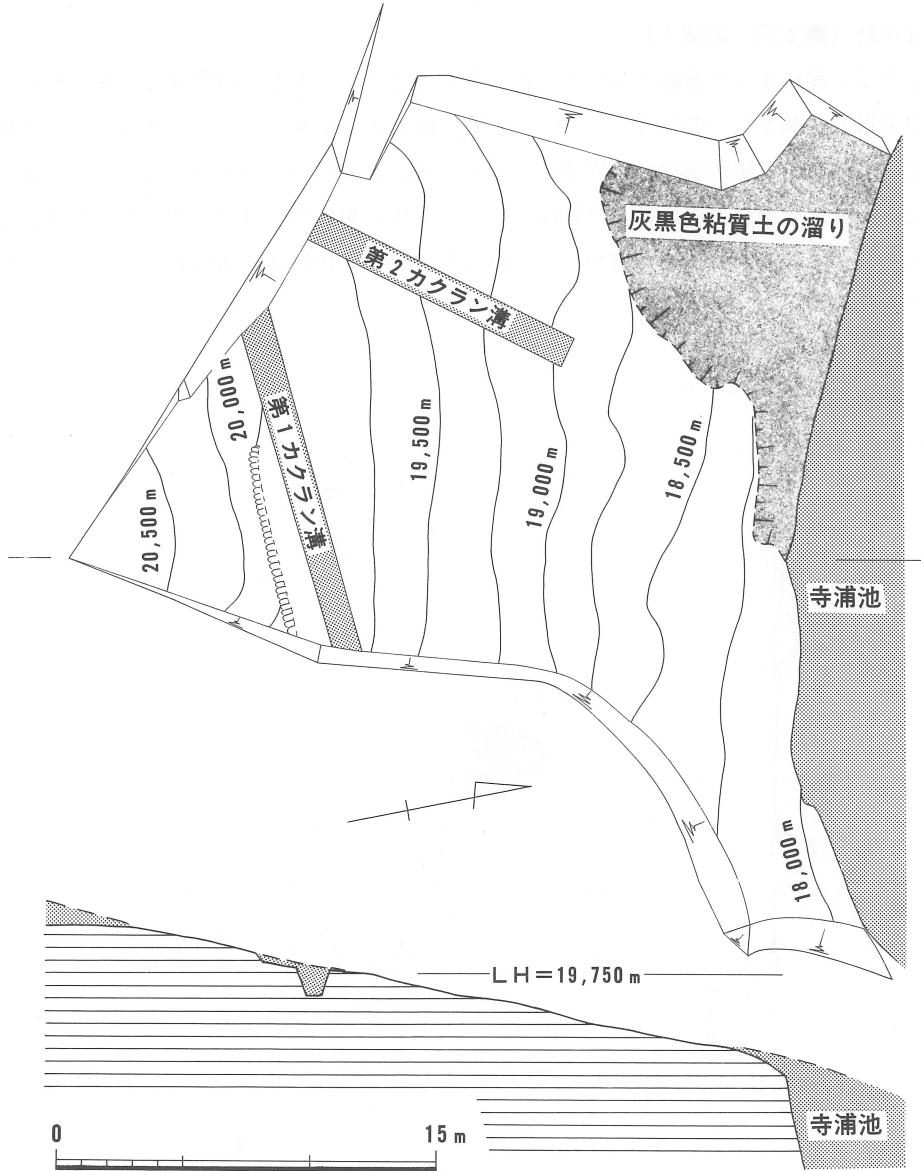
古くは原田大六氏鑑修の前原町文化財地名表、また福岡県遺跡等分布図「糸島郡編」には周知の埋蔵文化財包蔵地とされ、旧石器時代から弥生時代にかけての打製石器、玉類の発見が報告されている。付近在住の古老からも以前は畑の耕作中によく黒曜石製の打製石鏃や土器片が多く採取できたという話を聞いた。しかし現在見分できるのは、伊都歴史資料館に保管されている30個の打製石鏃のみで遺跡の時代。構造を的確に把握できるまでの資料に恵まれているとはいえなかった。また、旧字名である寺浦から推定される寺院の存在についても、現在のところ文書伝承等その存在を裏付ける資料は知られていない。

このため調査開始当初から、これらの疑問に答える手がかりとなる資料が発見されるのではないかという期待感があった。

今回の調査地点は笹山の東裾部の斜面にあたり、標高が海拔18～21mの高台である。調査区の裏には、約150m程の奥行きをもつ狭く険しい谷地がひかえており、谷地から流出した土砂が裾に堆積したごく小規模な扇状地形を呈している。そのため遺構面の土壌は風化したバイラン土の二次堆積層からなっており、斜面下方には一部鳥栖ローム層が、また寺浦池の崖面には、八女粘土層の露頭もみられた。調査区の北端は、一段下がって灰黒色粘質土を埋土とする落ち込みが北面に向かって広がっている。泥炭層中から押型文土器の細片や、弥生土器片が出土している。

調査区の斜面傾斜角度は約5.5度を計り、少々険しい傾斜である。傾斜方向はN-5°-Eで、ほぼ北側方向に面した暖斜面といえる。

寺浦遺跡と篠原新建遺跡に挟まれた谷部は現在は住宅密集地と化してしまったが、約20年ほど前までは伏龍池を水源とした南北に連なる湿田地であった。おそらく、寺浦遺跡に住をなしていた人々は、この湿地帯を生産可耕地として利用していたのであろう。



第7図 寺浦遺跡調査区表上除去後現況図 (1/300)

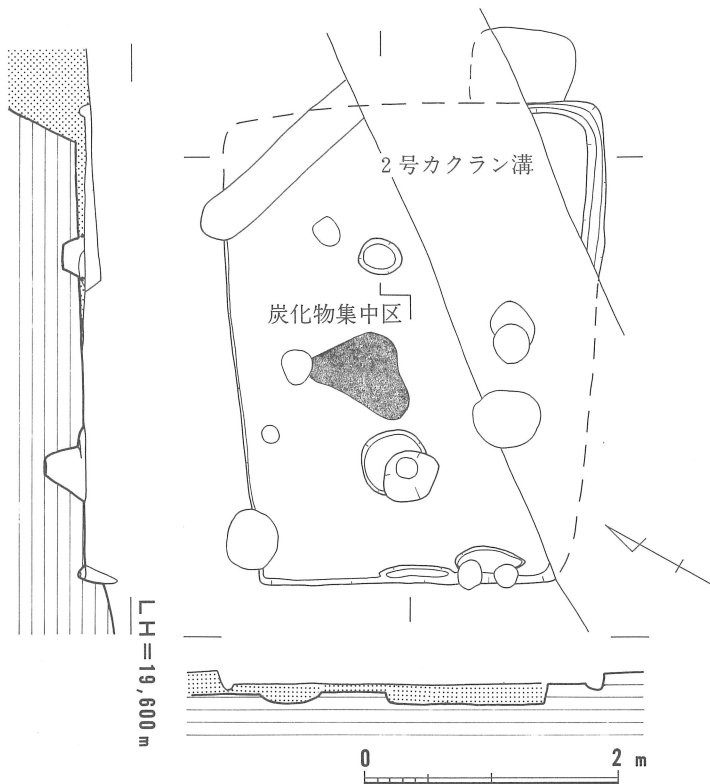
3. 調査内容

(1) 竪穴住居跡

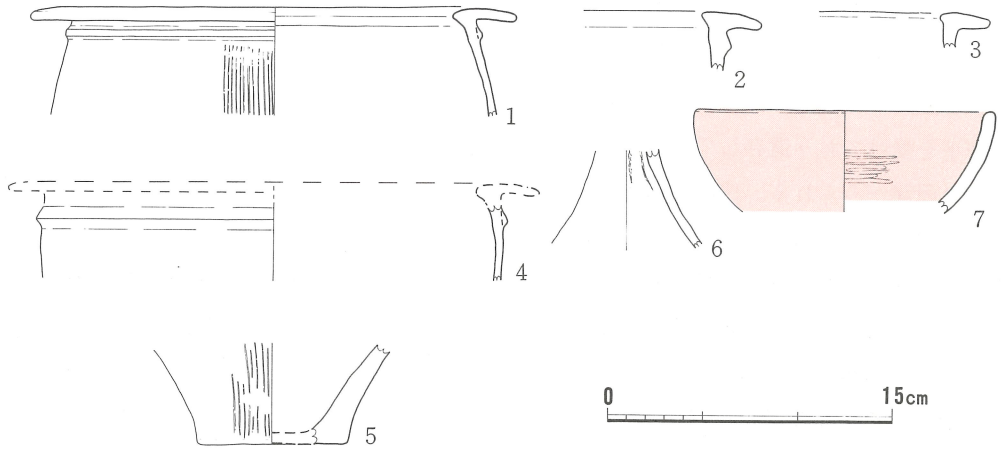
調査区内で発見した竪穴住居跡は、計6棟。1号住居跡の西に1号カクラン溝によって切られた方形の掘り込みを住居跡とすれば、計7棟になる。いずれも平面が方形ないし、長方形プランを呈するものである。遺構の削平・流失が著しいため、遺存状況は極めて悪い。

1号住居跡（第8図、図版3）

1号カクラン溝によって分断された不正長方形の平面プランをなす住居跡で主軸長3.82m、幅3.04mを計り主軸をN-60°-Eにむける。主軸方向に2本主柱をもっており、柱間は1.6mを計る。床面西隅および東南部に一部周構がみられるが、全周をめぐるものではない。かまど・炉址等はないが、床面中央部に70cm×70cmにわたって灰、炭化物が堆積し床土が赤変硬化した部分がみられた。灰土中に弥生土器の小片が混入しており。住居跡の居住者が何らかの目的で室内で火を焚いたものと思われる。



第8図 1号住居跡実側図 (1/60)



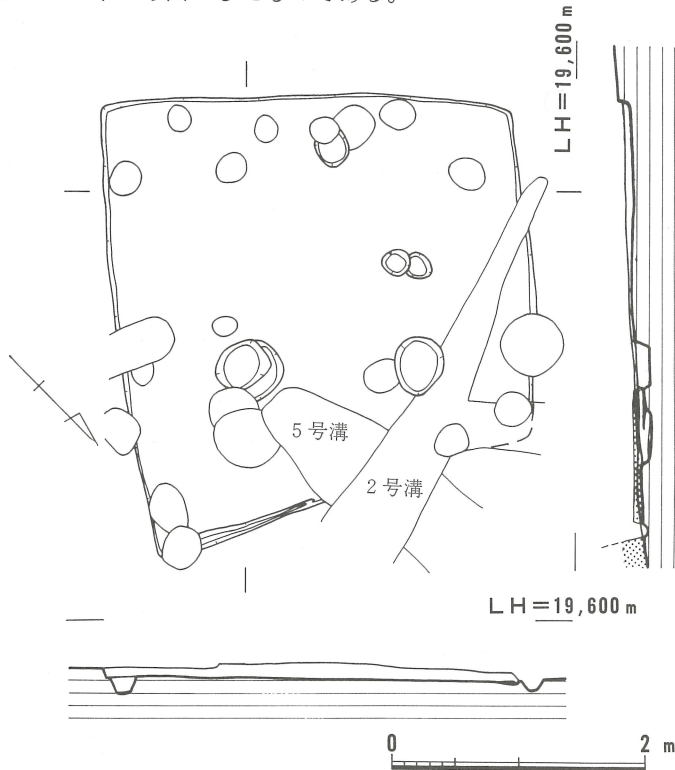
第9図 1号住居跡出土土器(1/4)

1号住居跡出土遺物(第9図, 図版3)

1, 5, 7は床面から, 他は埋土中から出土したものである。

1, 2, 4はいずれも口縁下に1条の三角突帯をもつ中形甕である。

1は復元口径25.3cmで, 口唇部は水平。端部がやや垂下し, 胴部は張りをもつ。5は底部であるが, 前4例とは別個体である。底径は8cmを計る。6は高杯脚部で上方に紋り痕がみられる。7は碗の口縁部で内外面とも丹が塗られており, 内面にはヨコ研磨の痕跡が残っている。



2号住居跡(第10図, 図版3)

第10図 2号住居跡実測図(1/60)

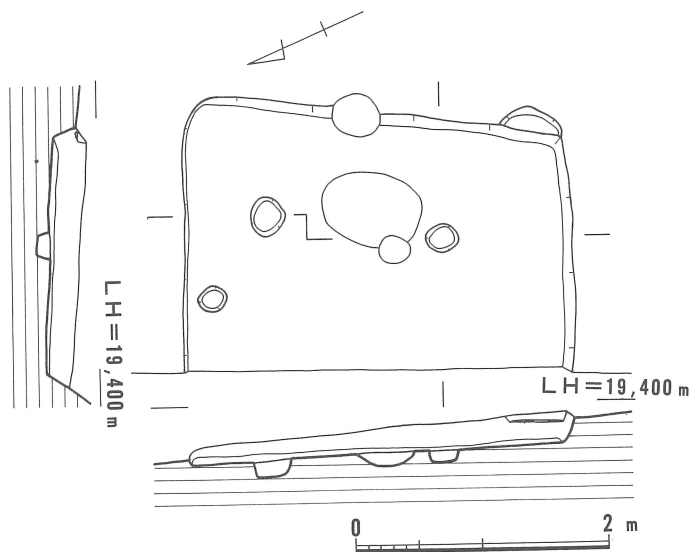
1号住居跡に東南角を切られた不正方形プランの住居跡でN-44°-Eに主軸をむける。主軸長は3.64m、幅3.34mを計る。北隅は削平を受けており遺存していないが北東部には周溝がみられる。住居跡に伴う柱穴には中央からやや東に寄って東南-北西に向けて2個みられるが、支柱として考えてよいものか疑問である。埋土中から出土した土器は少量の細片であった。

2号住居跡出土土器（第11図）

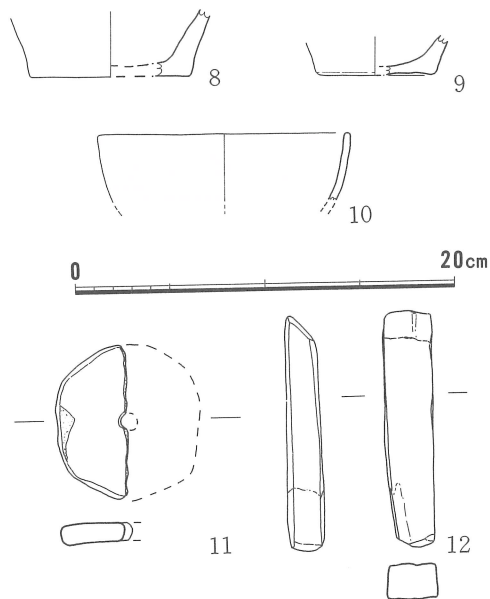
8は甕、9は壺底部片である。磨耗が著しいため調整等は観察できなかった。この他に高杯の脚柱部片が出土しているが、図示にたえないため割愛した。

3号住居跡（第12図、図版4）

調査区西壁にかかる住居跡で、西半分は未調査に終わった。4号掘立柱建物に切られている。主軸をN-20°-Eにむけており、長さは3.08mになる。検出した住居跡中で最も遺存状況の良い遺構で、最も深い床面は現況下22cmを計り、北西にゆるやかに傾斜している。支柱は4本になるものと思われ西側2本分の柱穴は浅く、柱間は1.4mを計る。検出壁面では周溝を確認することはできなかった。



第12図 3号住居跡実測図（1/60）



第11図 2・3号住居跡出土土器（1/4）
土製紡錘車石器実測図（1/2）

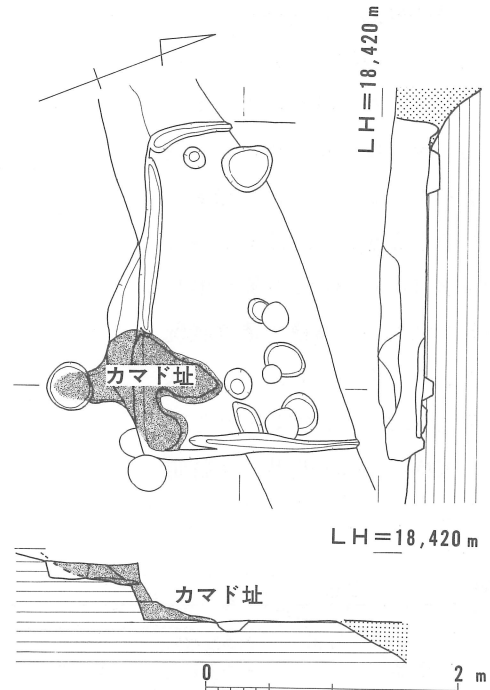
3号住居跡出土遺物（第11図）

10は、内外面とも丹を塗布した椀片である。底部からの立ちあがりがつつく、底の深い椀のようである。11は、土器胴部片を再研磨して製作された土製紡錘車で半分を欠失している。残存部の重量4.5g。周縁部は真円にほど遠くむしろ六角形に近い。粗製の製品である。12は小形柱状片刃石斧

の完形品で全長6.3cm，幅1.2cm，重さ14.39gを測る。材質は片麻岩製で刃部は磨耗している。側縁2ヶ所に縄縛の紐ずれ痕跡とみられるわずかな凹みが観察された。

4号住居跡（第13図，図版4）

調査区の北裾で検出した住居跡で，北半部を寺浦池掘削工事によって削り取られている。東西幅は2.64mを計り，主軸とするにはやや短かいため，恐らく主軸を南北方向にもつものであろう。推定主軸方位はN-22°-Eである。柱穴は数個確認できたが，住居の主柱を特定できるまでにはいたらなかった。遺構東南隅にはカマドが崩落した状態で検出している。黄色粘土塊が上方から押しつぶされた状態で壁に密着して堆積しており，粘土塊中央が大きく壁に向かって凹んでいる。カマドの南方に住居跡から続く幅25cmほどの凹みが伸びていた。その壁は赤変硬化しており，埋土に多くの炭化物が混入していることから，カマドの煙道に相当する施設であると考える。カマド部を除く壁面下には周溝がめぐっていた。



第13図 4号住居跡実測図（1/60）

住居跡の規模が他の住居跡に比べて小さく，住居の壁隅に煙道をもつカマドを構えていることや出土した土師器カメ（第32図，5）の特徴などから，6世紀末～7世紀を下限とする住居跡であると考えられる。

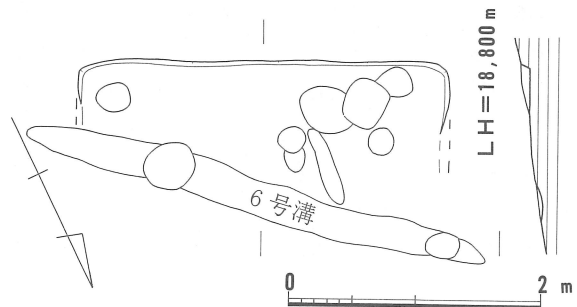
住居跡の規模が他の住居跡に比べて小さく，住居の壁隅に煙道をもつカマドを構えていることや出土した土師器カメ（第32図，5）の特徴などから，6世紀末～7世紀を下限とする住居跡であると考えられる。

4号住居跡出土土器（第13図，図版4）

口頸部のしまりがなく，かつ口縁がほぼ直立する土師器の甕である。外面は熱を受けたため赤変し器表は剥落しており，煤の付着が認められる。内面にはヘラケズリが施されており炭化物の付着がみられる。

5号住居跡（第14図）

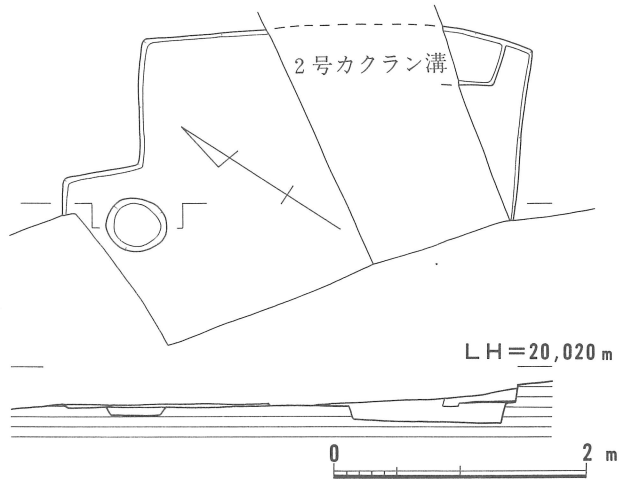
4号住居跡の南西に南壁および床面の一部を残すもので，南壁の幅は2.92m。住居に確実に伴う柱穴を特定することはできなかった。時期も確かなところはわからない。



第14図 5号住居跡実測図（1/60）

6号住居跡（第15図）

調査区の西隅に検出した住居跡で西半分を未調査区に残す。平面プランは方形あるいは、長方形をなすようである。周溝は確認できなかった。床面北隅に60cm×100cmの棚状の張り出しがみられたが、遺構の遺存状況がきわめて悪いため、ベッド状遺構であるか否かは不明である。遺構の時期も現状では特定できない。



第15図 6住居跡実測図（1/60）

遺物番号	部位	法量(cm) 口縁径、胴部 最大径、底径	胎土	色調	焼成	形態・手法	出土遺構
1	口縁部	25.6	白色透明砂粒を含む	暗褐色	良好	逆し字口縁で端部はやや下がりぎみ、器壁は薄手である。胴外面12本/27mmのタテハケ、内面にはナデを行う。	1号住居跡
2	口縁部	—	白色砂粒を含む	暗褐色	良好	1と同形であるが、胴部はより膨みをもたない。小片のため、口径は測定しなかった。	1号住居跡
3	口縁部	—	白色砂粒を含む	黄褐色	良好	甕の口縁小片。	1号住居跡
4	口縁部	—	白色砂粒を含む	黄褐色	良好	胴部三角突帯下の部分である。あまり膨まない器壁の薄い甕である。	1号住居跡
5	底部	—	白色砂粒を多く含む	淡黄褐色	良好	器壁の厚い底部である。外面には粗いタテハケ、内面にはナデを行う。	1号住居跡
6	脚部	—	白色砂粒を多く含む	淡桃褐色	良好	高杯膨柱下部である。上部には浅い絞り痕跡がみられる。器表が剥落しており調整は判断がつかない。	1号住居跡
7	体部	15.8	白色砂粒を多く含む	黄褐色	良好	碗の体部で、器厚が厚い。体部の湾曲はゆるやかである。内面にはヨコ研磨がみられる。	1号住居跡
8	底部	—	白色砂粒を含む	黄褐色	良好	甕底部片でほぼ平底とみられる。遺存状況が悪く調整は判然としないが内外面ともナデによるとみられる。	2号住居跡
9	底部	—	白色砂粒を多く含む	黄褐色	良好	小形甕の底部で胴部の立ちあがりはきつい。	2号住居跡
10	体部	10.3	小砂粒を多く含む	淡赤褐色 (丹塗)	良好	薄手の碗形土器体部で立ちあがりきつい。内外面とも丹が塗布されている。器壁は薄い。	3号住居跡

第2表 住居跡出土土器観察表

7号住居跡 (第25図)

2号カクラン溝によって大きく削られた遺構で、南東隅が一部残存するのみである。土器等の出土も見られず時期は不明である。

(4)掘立柱建物

調査区内から弥生中期の掘立柱建物2棟、時期が定かでない掘立柱建物2棟を確認した。

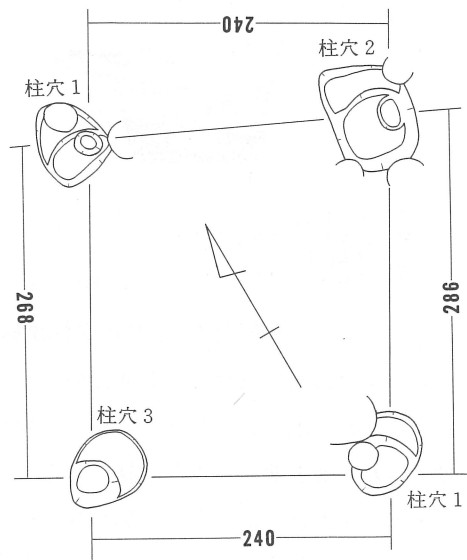
弥生中期の掘立柱建物については、北部九州においても類例が増加しており、その規模は1×1間から1×3間の建物が大半を占めるようである。柱穴が一辺50~80cm程の不正方形、長方形を呈し、柱間が2~3mを計るものは高床式倉庫と考える説が一般的で、福岡市席田久保園遺跡、北九州市辻田西遺跡、北方遺跡、守恒遺跡、などでの発見が報告されている。守恒遺跡では住居として使用したとみられる例も発見されている。^{註7 註8 註9}

本遺跡1号掘立柱建物は建物を解体し主柱を抜きとった後に柱穴に破碎土器を投棄する祭祀的行為が行われているのは注目される。守恒・席田久保園遺跡例でも、意識的に柱穴内に壺、甕、高杯等の土器を破碎・投棄した状況がうかがわれ今後もこのような類例は増加してゆくものと思われる。今後は柱穴内の土器の出土状況にもより一層の注意を払う必要がある。

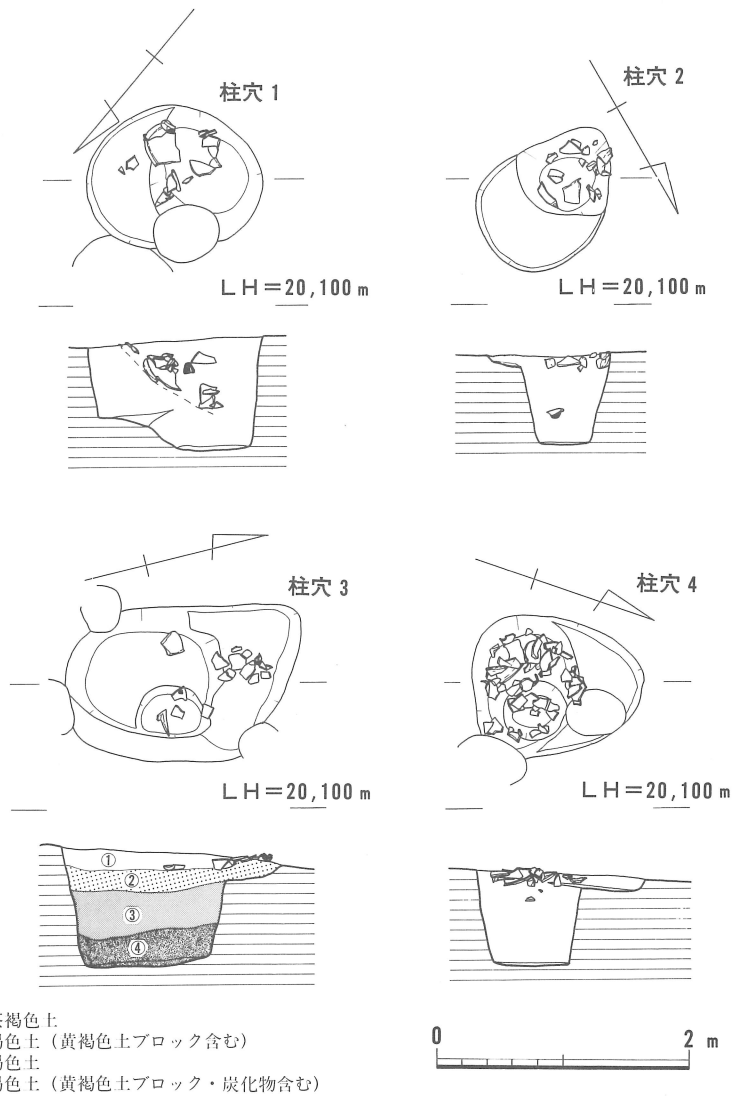
1号掘立柱建物 (第16図, 図版5)

調査区の南、6号住居跡の西側に位置する、主軸をN-30°-Eに向けて建てられた建物跡である。柱穴のプランは不定形の長方形あるいは、長楕円形を呈している。

柱穴のプランを検出した当初は、第17図に示すように埋土上層に多量の弥生土器片や炭化物がみられる状況であった。土器構成を観察すると丹塗研磨土器の割合が高かったため、個々の柱穴がそれぞれ独立した祭祀行為に伴う土器の廃棄場であるという認識のもとに調査を実施した。しかし、4つの土壙の配置が長方形を呈していること。土壙がいずれも底部に向けてほぼ垂直に掘り込まれており、かつ柱穴2、4からは、底部に柱痕跡状の径20~25cmほどの凹みが観察されたこと。土器が柱穴1を除き埋土の表層近くにふりまかれた状態で出土しており、後述するように整理の段階で、各土壙間の土器が接合関係をもつことが判明したなどから、4個の土壙を1間×1間の柱間をもつ掘立柱建物の柱穴として理解するにいたった。

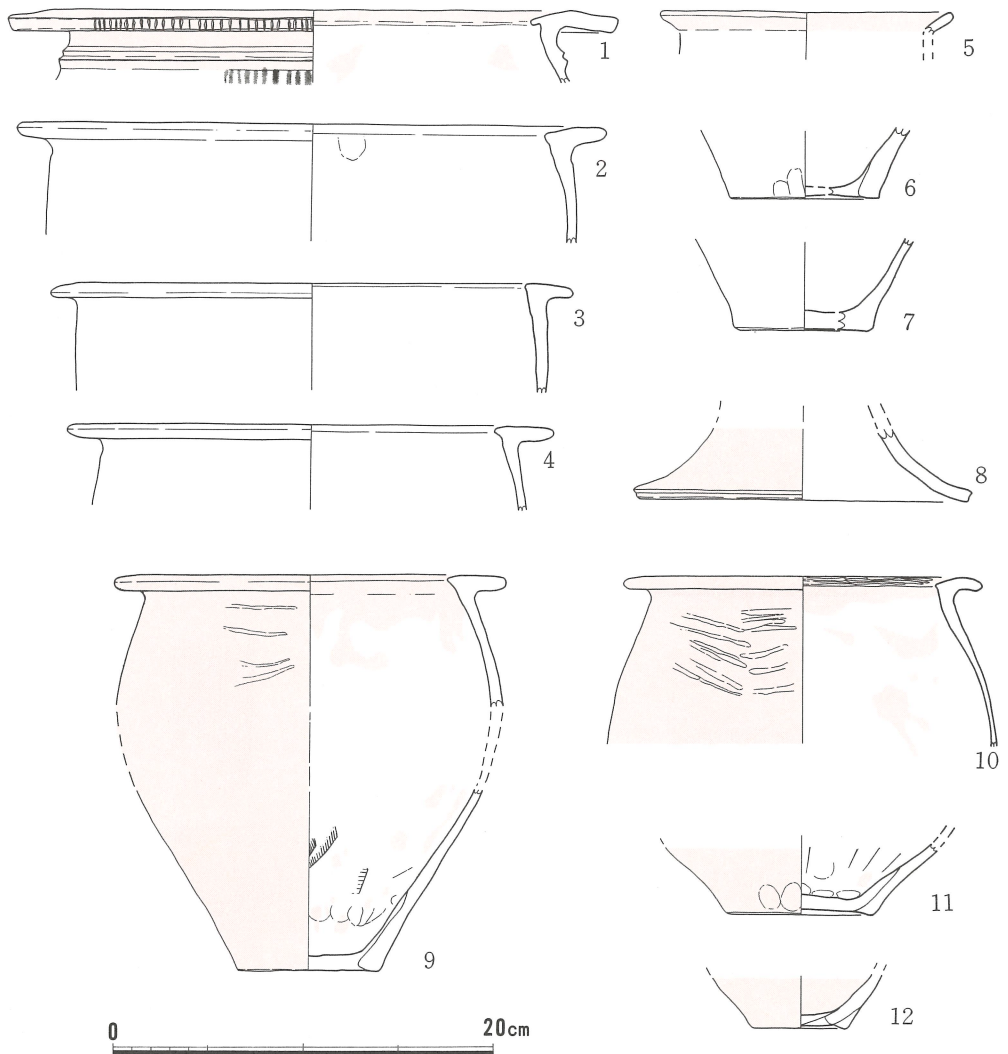


第16図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)



第17図 1号掘立柱建物柱穴土器出土状況 (1/30)

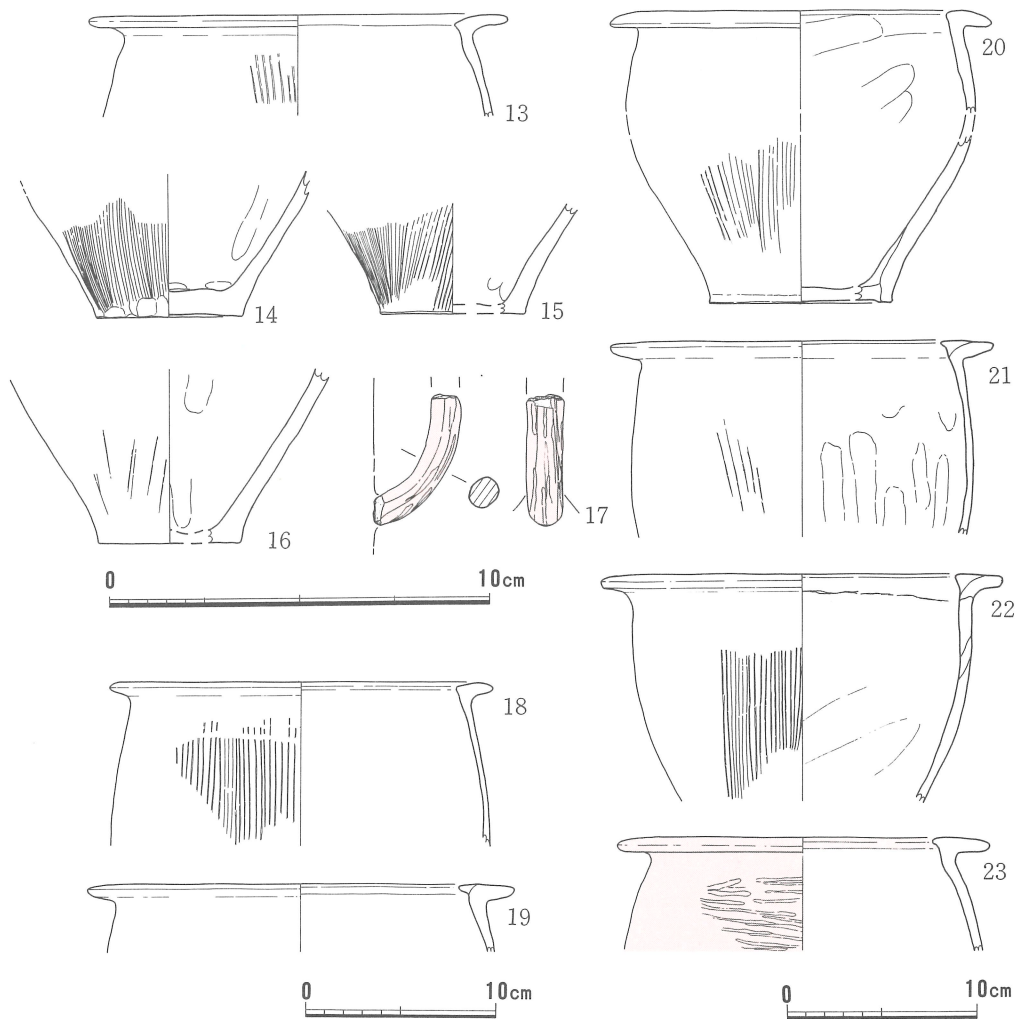
柱穴内の土器の出土状態は2形態に分かれる。柱穴1では、土器が傾斜面をすべり落ちるような状態で斜めに堆積しており土器片も比較的大きい。柱を引き抜いた後、抜き取り壙に土器片を投入した状態を想定できる。柱穴2では埋土が4層に分かれ、黄褐色土がブロック状に混入している。土器は細かくたたき割られた後に上層に一様にふりまかれたような状況を示しており、この状況は柱穴3、4にも共通して観察されたが、柱を掘り抜き埋め戻した後に柱穴表層に土器片を廃棄したものと考えられる。



第18図 1号掘立柱建物柱穴1出土土器実測図(1/4)

1号掘立柱建物出土土器(第17~19図, 図版5)

出土した土器は細かく割れ、4個の柱穴に分配されており、かつ、柱穴の上面は削平を受け、かなりの土器片が散逸したものとみえ、完形に復することのできた資料は認められなかった。図示できた土器28点の中では甕と短頸壺が23点を占め、高杯広口壺等の量が少なく、また丹塗土器は甕壺高杯のあわせて10点にのぼる。甕以外は全て丹塗土器で占められているということになる。甕は大半が口径20~30cmの中形甕でやや胴部に張りをもちはじめたタイプが主流を占め、短頸壺は8に代表されるごとくあまり肩の張らない、やや丈の高いものが多い。丹塗土器



第19図 1号掘立柱建物柱穴2・3・4号出土土器実測図(1/4)

は9, 10, 12に顕著のように赤色顔料をふんだんに使用されている。特に12は土器の内外面のみならず裏底にまで顔料が塗られた特殊な小形土器であるが、壺であるのか碗であるのか現況では判断し難い。柱穴2から出土した土器では17が注目される。把手下半部のみの出土であるがジョッキ形土器の一部と考えてよさそうである。把手の大きさから推定してかなり大型の製品となるが、本体部分の出土がなかったのが残念である。

柱穴3から出土した土器は少量で、甕2点を図示できたにすぎない。

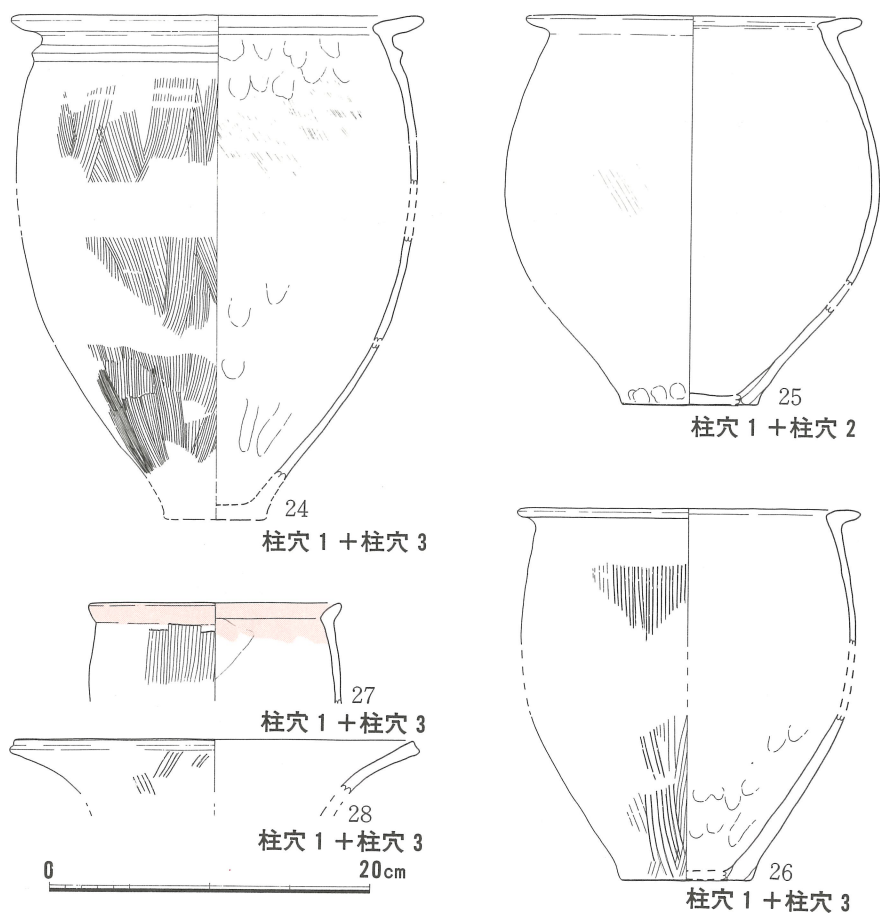
柱穴4は出土土器の量が最も多かったが、人為的に破碎・廃棄されていたような出土状況を呈しており、また土器片も小さいため、接合しえた数は予想に反して少なかった。図示した土

器も残存状況は極めて悪く、図上復元したものが多い。

柱穴間で接合、あるいは同一個体であることが確認できたのは5個体である。

24は柱穴1-3間において口縁部が接合したが大半の部位は柱穴1からの出土である。口縁が逆L字の形態を保ちながら若干立ちあがりかけた様相を示している。25は柱穴1-2間において胴部が接合した。口縁は24と同様の様相を示すが器高に比べて底径が大きいのが特徴である。器表の磨耗が著しい、26も25と同様の形態をもつ。27は小形の甕であるが、口縁部内外に丹塗りが認められた。柱穴1, 3間での接合関係をもっている。28は広口壺の口縁片で、27と同様に柱穴1-3間での接合関係を示している。この土器には赤色顔料を塗った痕跡は認められず、また焼成もよくない。

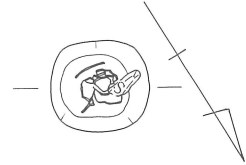
柱穴から出土した土器は甕口縁の形態に多様性が見られるもののおおむね弥生中期後半の域を出るものではない。建物の用途について上部構造の明確でない現状においては判断が難しいが、高床倉庫、祭祀関連建物等を想定することができよう。



第20図 1号掘立柱建物柱穴間接合土器実測図 (1/4)

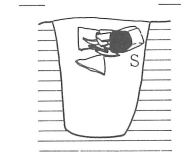
(1号掘立柱建物関連遺構)

柱穴内から弥生土器がまとまって出土した例は1号掘立柱建物以外では後述する2個の柱穴列があげられる。いずれも周囲に連続する柱穴列を確認できなかったので掘立柱建物の柱穴としてよいものか判然としないが、出土状況が類似していたので紹介しておく。



柱穴55 (第21図, 図版6)

2号土壌を切って掘りこむ隅丸方形の柱穴で、調査当初は1号掘立柱建物柱穴と同様に祭祀土壌と考えていたが、土壌の壁が垂直に落ち かつ深いことから柱穴とした。ちなみに現況から底面まで47cmを計る。上層からほぼ完形に復元できる甕形土器2个体分のみが



第21図 柱穴55土器
出土状況 (1/30)

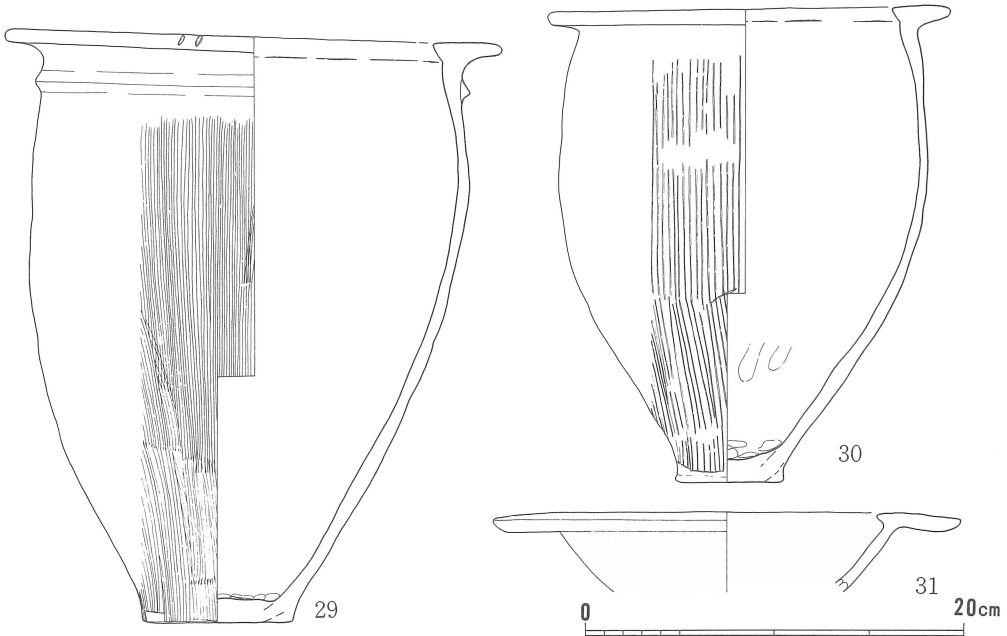
拳大の長石の下敷きになって出土している。出土状況からみてこれらの土器も柱穴内に埋納される以前に既に破碎されていたようである。石は土器を破碎する際に使用されたのか、あるいは柱穴を埋め戻した際の封の意味を有していたのかもしれない。

柱穴55出土土器

出土した甕はどちらも中形甕に属す。30の表面には黒色顔料を塗布しており、剝離した胴部と口縁部外面の一部に顔料が残存していた。

柱穴76

1号土壌の東に隣接する柱穴である。底から丹塗高杯の杯部が出土している。

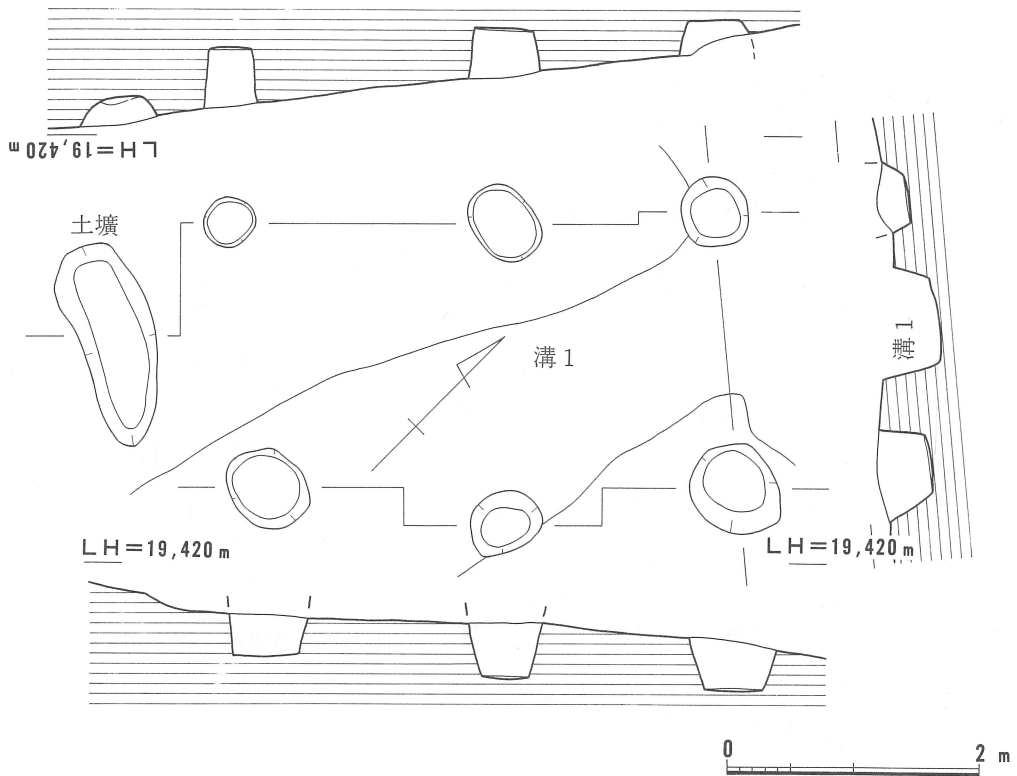


第22図 柱穴55, 76, 出土土器実測図 (1/4)

遺跡 番号	器種 部位	法量(cm) 口縁径、胴部 最大径、底形	胎土	色調	焼成	形態・手法	出土遺構
1	甕 口縁部	32.1 — —	雲母片、小 砂粒を含む 良	明橙褐色	良 好	丹塗精製甕口縁部で、逆L字の口縁の端面には刻みをめぐらす。口縁部下の凸帯はM字凸帯でその下方にタテ研磨の暗文がある。	1号掘建 柱穴1
2	甕 口縁部	31 — —	大粒の長石 を含む	明茶褐色	有黒斑で 焼成良好	やや内傾する丸みをもった逆L字口縁で、胴部は若干ふくらむ程度である。内外面ともナデ調整による。	1号掘建 柱穴1
3	甕 口縁部	27.6 — —	花崗岩粒を 多く含む粘 土	暗茶褐色 (内面暗赤褐色)	良 好 や や 軟 や 質	若干垂れる逆L字口縁である。胴部はゆるやかな丸みをもつようだ。内外面ともナデ調整仕上げである。	1号掘建 柱穴1
4	甕 口縁部	25.6 — —	雲母片を含 む	茶褐色	良 好	ほぼ水平な逆L字口縁部をもち、胴部はやや膨む。内外面ともナデ調整を行う。	1号掘建 柱穴1
5	甕 口縁部	15.5 — —	やや粗い粘 土	橙褐色	良 好 や や 軟 や 質	くの字状口縁の甕口縁の小形甕の口縁片で、内外面とも口縁部に丹が塗られている。27と同種のもの。	1号掘建 柱穴1
6	甕 底部	— — 7.9	白色砂粒を 含む	橙褐色	良 好	平底の甕底部である。内外面ともナデによる仕上げが行なわれている。	1号掘建 柱穴1
7	甕 底部	— — 6.9	長石粒を含 む粘土	灰褐色 (内面明赤褐色)	良 好	若干上げ底の甕底部である。外面はタテハケの後ナデ、内面はナデ仕上げが見られる。底内面には、炭化物が付着する。	1号掘建 柱穴1
8	高杯 脚部	— — 17.4	精良な粘土	橙褐色	良 好	丹塗高杯脚部であるが、器表は剥落が著しい。脚裾端面は凹面をなす。	1号掘建 柱穴1
9	短頸壺	20.7 — 7.4	小砂粒を若 干ふくむ 良	橙褐色	良 好	丈高の短頸壺である。逆L字口縁で胴は膨む。外面および内面口縁下には丹が塗られている。外面のヨコ研磨は判然としない。	1号掘建 柱穴1
10	短頸壺 口縁部	19 — —	小砂粒を含 む良	濃橙褐色	良 好	最大径を胴中位にもつ短頸壺で、逆L字の口縁には丸みがみられる。胴部外面および口縁部には丁寧な研磨内面にはナデが行われる。	1号掘建 柱穴1
11	壺 底部	— — 7.8	花崗岩粒、 雲母小片を 含む良	明橙褐色	良 好	丹塗短頸壺の底部であろう。底は若干の上げ底である。内面は板状工具によるタテ方向のナデがみられる。	1号掘建 柱穴1
12	壺 底部	— — 4.9	粗い砂粒を 含む粘土	明橙褐色	良 好	若干上げ底ごみである。内外面、特に底部にまで丹が付着している胴部には丸みがある。碗か異形の小型壺であろう。	1号掘建 柱穴1
13	甕 底縁部	21.1 — —	花崗岩粒を 含む粒い粘 土	明橙褐色	良 好	内傾し丸みをもつ逆L字口縁をもち、胴部は膨む。外面のハケは7本/20mmと粗く、内面はナデ調整が行われる。	1号掘建 柱穴1
14	甕 底部	— — 7.8	長石、石英 粘を含むが 良質	明赤褐色	良 好	底部に若干の上底がみられる。胴部中位は膨みをもつものとみられる。外面には10本/17mmのタテハケ、内面にはナデが行われる。	1号掘建 柱穴1
15	甕 底部	— — 7.6	大粒の石英、 長石粒を含 むが良質	淡赤褐色	良 好	底厚の薄い底部片である。外面には10本/20mmのやや斜め方向へのハケ、内面にはナデが行なわれる。	1号掘建 柱穴1
16	底部	— — 7.4	大粘の石英 長石粒を含 む粗い粘土	暗赤褐色	良 好 や や 軟 や 質	あまり膨みをもたない胴部をもつ甕。外面には板ナデ、内面にはナデ調整を行っている。	1号掘建 柱穴1

第3表 掘立柱建物他柱穴出土土器観察表

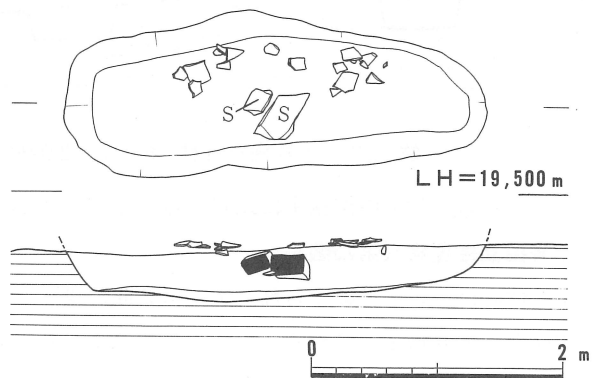
遺物 番号	部位	法量(cm) 口縁径、胴部 最大径、底径	陶土	色調	焼成	形態・手法	出土遺構
17	ジョッキ 形土器?		精良な粘土	明黄褐色	良好	ジョッキ形土器の把手部。直径1.5cm程の粘土紐を曲げて本体に接合したのであろう。丹塗研磨が行なわれる。	1号掘建 柱穴2
18	甕 口縁部	20.2 — —	良質の粘土	暗黄褐色	良好	やや内傾する逆L字口縁で、胴部は若干ふくらむ程度である。外面は16本/28mmのタテハ内面はナデ調整を行う。	1号掘建 柱穴3
19	甕 口縁部	22.6 — —	長石粒を多く含む	明赤褐色	良好	ほぼ水平な逆L字口縁をもち、内方への突出が顕著である。	1号掘建 柱穴4
20	甕	20.1 — 9.7	角閃石粒を多く含む	暗灰黒色	良好	若干下へ垂れぎみの逆L字口縁をなす。外面下半は粗いタテハケ、上部はヨコナデを行う。内面は丁寧なナデ調整で仕上げている。	1号掘建 柱穴4
21	甕 口縁部	20.2 — —	長石粒を含む良質粘土	明褐色	良好	ほぼ水平な逆L字口縁である。胴はあまり膨みをもたない。外面は粗いタテハケの後ナデ、内面は強いナデ調整を行っている。	1号掘建 柱穴4
22	甕 口縁部	21.2 — —	良質の粘土、雲母片を多く含む	明褐色	良好	短い逆L字口縁で、胴部は張らずに底部にむかってすぼまるのみ。外面はタテハケの後粗いナデ消し、外面にはヨコナデが行われる。	1号掘建 柱穴4
23	短頸壺	19.6 — —	小砂粒を含むやや粗い粘土	黄褐色	良好 やや軟質	丈の高い無頸壺で胴中に最大径をもつようだ。外面および内面口縁には丹塗研磨、内面にはナデ調整を行う。	1号掘建 柱穴4
24	甕	25.8 — —	白色砂粒を多く含む	暗茶褐色	良好	内傾するための逆L字口縁をもつ、胴部は膨み外面は11本/20mmの密なタテハケを、内面はナデ調整を行うが一部ハケの痕跡を残す。	1号掘建 柱穴1-3
25	短頸壺	21.1 23.6 8.6	大粒の長石粒を含む粗い粘土	明褐色 (内面白みをおびる)	良好	内傾する逆L字口縁が胴部に大きく膨み胴最大径は口径を上回る。内外面ともナデ調整を行うが、外面一部にハケの痕跡を残す。	1号掘建 柱穴1-2
26	甕	25.8 — —	角閃石粒・長石粒・雲母片を含む	淡桃褐色	良好 やや軟質	内傾する短い逆L字口縁をもち胴最大径は口径にほぼ等しい。外面下半は粗いハケ、上半は細いハケ、内面はナデ調整を行う。	1号掘建 柱穴1-3
27	甕	15.8 — —	花崗石粒を含む	明桃褐色	良好	くの字状口縁をもつ甕で、内外面とも口縁部に丹が塗布されている。外面にはタテハケ、内面にも。	1号掘建 柱穴1-3
28	広口壺	25.6 — —	長石粒を含む	暗茶褐色	良好	粗製の広口壺である。口縁部は凹みをもつ。外面はタテの粗いハケの後ヨコナデ、内面にはヨコナデを施す。	1号掘建 柱穴1-3
29	甕	26.0 23.0 8.0	白色砂粒を含む	淡黄褐色 (一部暗黄褐色)	良好	水平な逆L字形口縁で口唇部に2個の板木口による列点がみられる。外面には11/20mmの密なハケが、内面はヨコナデが行なわれる。	柱穴55
30	甕	21.3 19.5 5.7	白色・黄白色砂粒を含む	暗黄白色	良好	水平な逆L字形口縁で胴部がやや張り出す。外面には8本/20mmの粗いハケの後口縁部下はヨコナデ、内面にはナデ調整が行われる。	柱穴55
31	高杯	24.7 — —	白色小砂粒を含む良質の粘土	桃褐色	良好	口縁部がやや下方に垂れぎみの鋤状口縁の杯部のみである。内外面とも丹塗り、ヨコ方向の研磨が施されている。	柱穴76



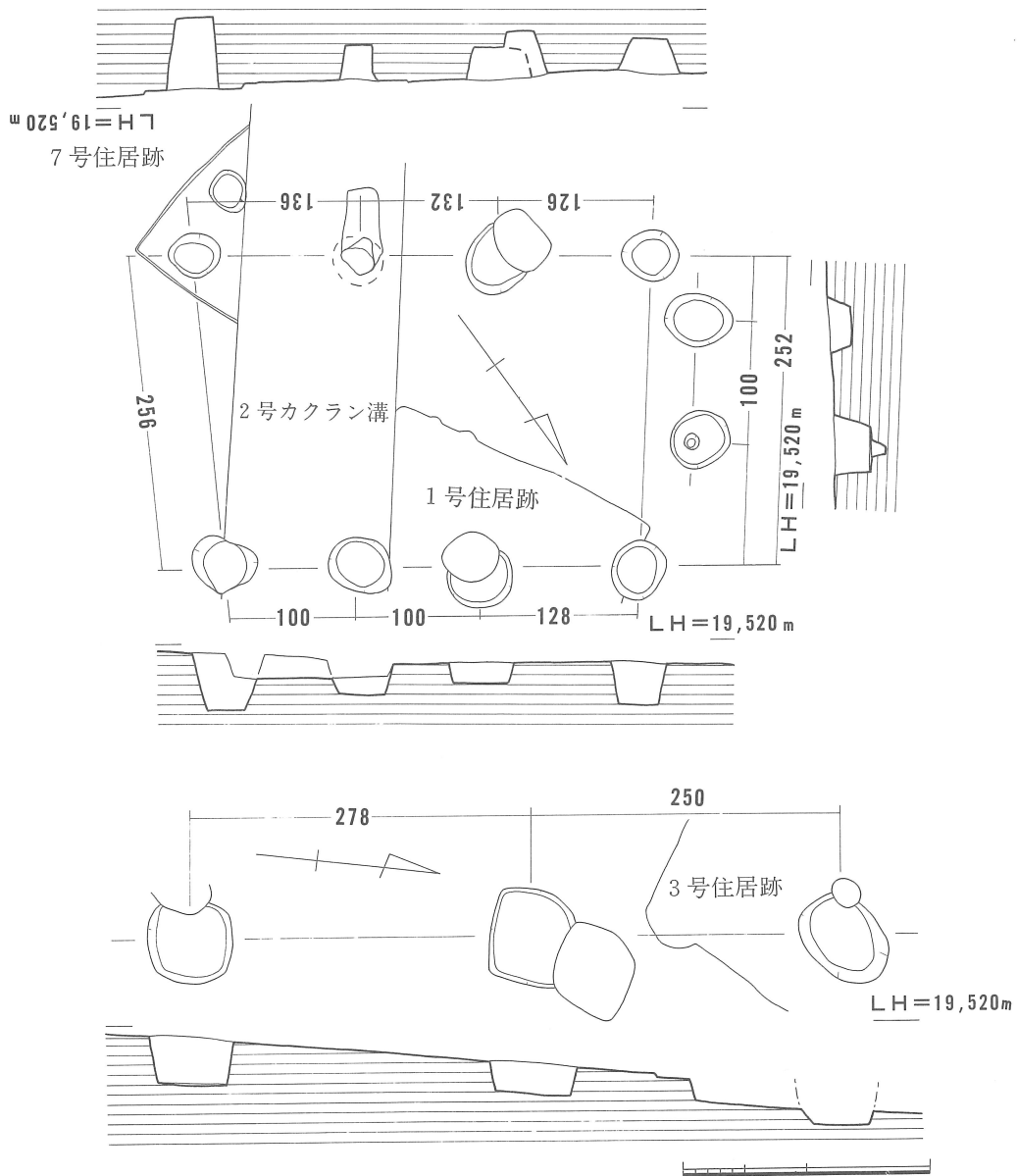
第23図 2号掘立柱建物実測図 (1/60)

2号掘立柱建物 (第23~24図, 図版7)

溝1に斜位に切られる1間×2間の建物跡で主軸はN-47°-Eに向けて建てられている。個々の柱穴の規模は1号とさほど遜色ないが、平面形態は一様でなく、柱間も一定していない。うえ、斜面を下るにつれて深さを増している。柱痕跡は観察することができなかった。柱穴内からは1号とは対称的にほとんど遺物を検出することはできなかった。建物跡の西南側に主軸と直交するように不整形で全長165cmほどの浅い土壇を発見した。埋土中から第24図にみられるように破碎された甕片と直方体の切石2個が出土している。同一個体ではあるが、ほとんど接合せず口縁・底部の部位は全くふくまれていなかったため図化は控えた。しかし胴部にかなりの張りがみられること。外面調整に丁寧なタケハケがみら



第24図 2号掘立柱建物土壇土器出土状況 (1/60)

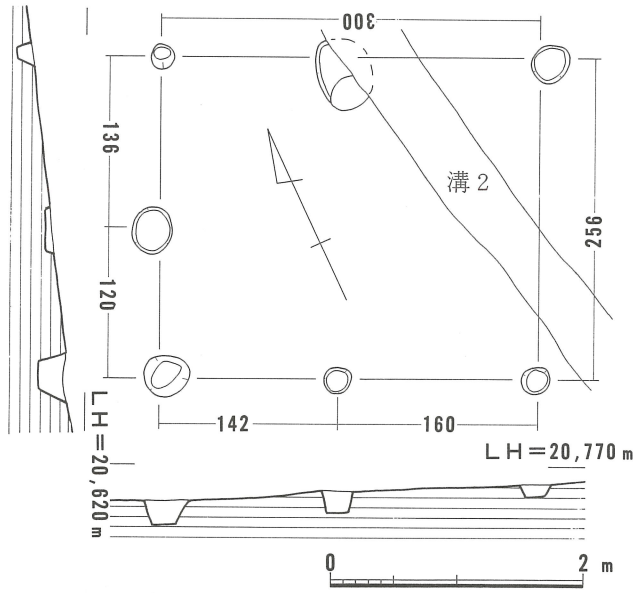


第25図 3号堀立柱建物(上)・2号柱穴列実測図(下)(1/60)

れることから、弥生中期後半に比定することができる。

3号掘立柱建物(第25図)

1号住居跡を切って建てられた1間×3間の建物で主軸をN-53°-Wに向けている。四隅の柱穴が深く掘り込まれており、1、2号建物より柱穴規模はやや小さく柱間の間隔が狭い。建物北西部に主軸に直交して配された2個の柱穴があるが、建物に伴うものであるという確証は



第26図 4号掘立柱建物実測図 (1/60)

ない。各柱穴埋土からはいずれも少量の弥生中期土器片が出土しているが建物の柱穴の埋没時期の上限を示す程度である。

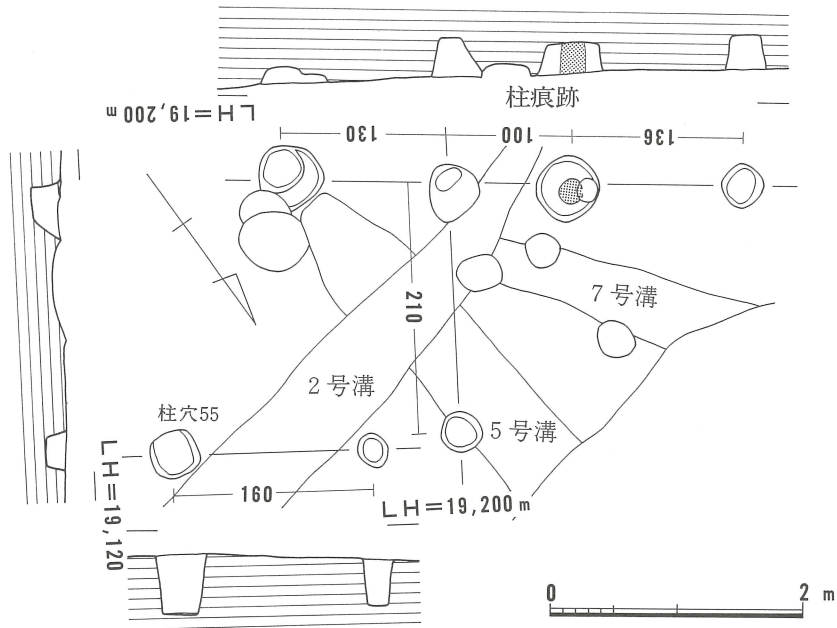
4号掘立柱建物 (第26図)

調査区南隅に残る2間×2間の建物跡で、主軸をN-65°-Wにとる。柱穴の径が20~35cmほどで、前記の建物跡より小さく、埋土の色も黒褐色であった。埋土には弥生土器片が少量含まれるが遺構の上限をたどれるにすぎず、埋土の色が溝遺構と同色であるこ

とから、7世紀以後の建物跡である可能性が高い。

柱穴列 (第25図, 第27図)

掘立柱建物として確認することができなかったが、類似した柱間をとる柱穴列がみられた。



第27図 1号柱穴列実測図 (1/60)

1号柱穴列は3号住居跡を切って掘り込まれていた。各柱穴は一辺60～70cmの隅丸形状で、1間×2間+αの建物跡の一部とも考えられる。2号柱穴列は2号住居跡のを切り、ほぼその主軸と直交して並んでいた。この柱穴列と近接して柱穴55がある。3号柱穴列は2号土壙を切ってならぶ。柱穴の埋土は4号掘立柱建物と同じ黒褐色土であるため、弥生時代の遺構とは考え難い。

(3) 土 壙

調査区内に2基の方形土壙がみられたがいずれも弥生中期の貯蔵穴であろう。

1号土壙(第28図)

2号カクラン溝に大きく削られた長方形プランの貯蔵穴で主軸はN-41°-E、主軸長2.47m、幅2.07m、床面に柱穴が見られた。埋土中から弥生土器、砥石、磨石等が出土している。

1号土壙出土土器(第29図)

出土した土器は少量で、かつ実測図に耐えうるのは図示した3点のみである。

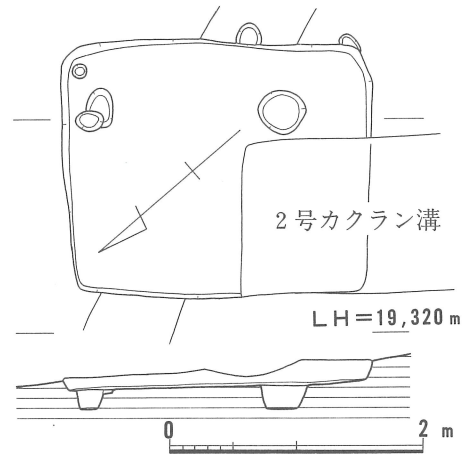
1は口縁径24cmの中形甕の口縁部である。逆L字の口縁端部はまるびをおび、胴部から張りをもたず、なだらかに底部にむかってすばまる。胎土には花崗岩粒を多く含み、色は暗茶褐色、焼成は良い。

2は壺底部で底径は6.5cmほど、胎土には白色小砂粒を多く含み、色は乳橙色で焼成は良い。

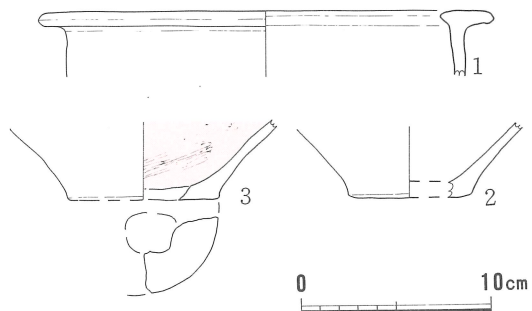
3も壺底部であるが、内部には丹が塗られ横方向に研磨された痕跡を残している。底部には方形の穿孔が施されていた。色調は淡黄褐色で良質の粘土を使用しており、焼成も良好である。

1号土壙出土石器

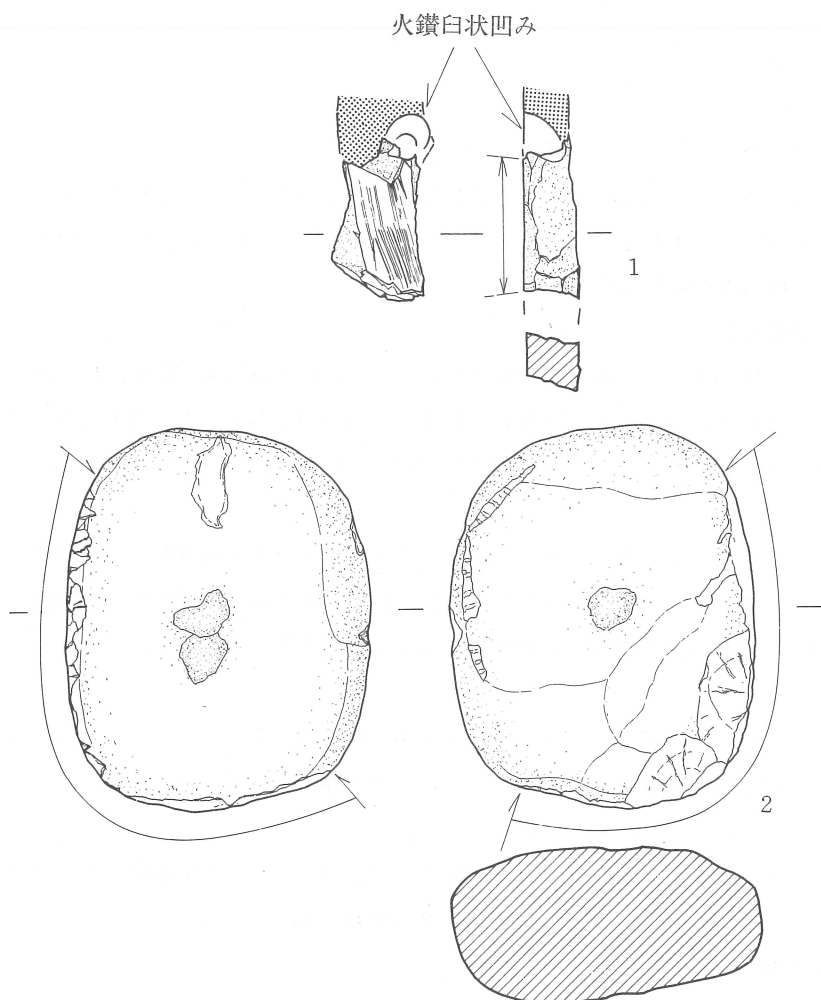
1は砥石の一部であろう。頁岩を原材として使用しており割れて小片として化しているが、残存している砥石面には無数の擦痕が残っている。実測図の上方部分にわずかではあるが火鑽白状のU字型の凹みが確認された。表面からの深さは1.2cm、孔側面には明瞭な回転擦痕が残っている。橋口達也氏が提唱された、「石器の穿孔の際の穿孔具の上端にのせて穿孔具を固定するもの」の円孔と同様の痕跡をもってい



第28図 1号土壙実測図(1/60)



第29図 1号土壙出土土器実測図(1/4)

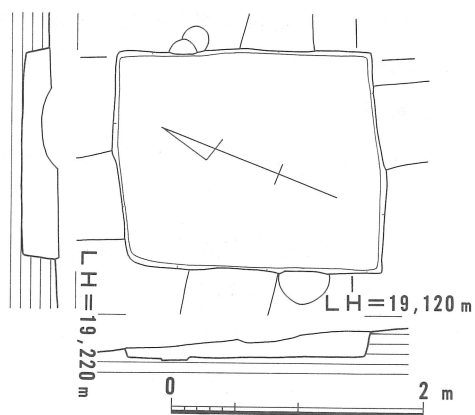


第30図 1号土壙出土石器実測図 (1/2)

るが、小片であるのが残念である。2は磨石で石材は砂岩。重量は517gを計る。表裏面ともに中央部に小さな凹みを設ける。側縁部には巧打、擦過による小剝離、磨耗が観察された。

2号土壙 (第31図)

1号土壙の北西に隣接する方形プランの土壙で1号と同じく貯蔵穴であろう。主軸はN-21°-Wを通り主軸長2.15m、幅1.74mを計る。柱穴55に切られていることから弥生中期後半より下ることはない。



第31図 2号土壙実測図 (1/60)

(4) 溝

溝状の遺構は長短あわせて9条確認したが、1号溝が流水した痕跡を残す他はその機能が明確でない。しかし、灰黒色粘質土層が寺浦池築造に先立つ貯水施設の名残りであるとすれば各溝がこれに流れ込む流水路として機能したものと理解できる。溝の掘り込まれた時期は大きく、1号溝と4号溝の機能時期に分けられる。

1号溝(図版8)

調査区東を、等高線にほぼ直交して伸びる溝である。幅は170cm、深さは20cm程度と浅い。溝底面は、流水による侵食を受けたために数条の深い小溝がみられた。また2号掘立柱建物下では高さ50cm程の段差がみられ、抉れた侵食崖と、深い水溜りが形成されていた。

2号溝

4号溝より新しく、1号溝と交差する溝であるが1号溝との先後関係は明らかではない。現況では浅く、なだらかなU字状の断面形態をしており、幅は60cm程度が平均である。埋土中から、須恵器片、土師器甕の把手、糸切り底土師器片が出土している。

3号溝

1号溝に切られ、4号溝と交差するが先後関係は明らかでないが、交差部でレベル差がないことから同時期に共存していた可能性もある。出土遺物は土器細片のみである。

4号溝

調査区を南北に連なる溝で、ゆるやかな西向きに弧を描きながら等高線に対し斜めに横切り、灰黒色粘質土層落ち込みに続く、流水した明瞭な痕跡は認められなかった。

5号、7号溝

2号住居跡の途中から北に伸びる溝で2号溝に切られる。灰黒色粘質土層に続いている。

6号溝

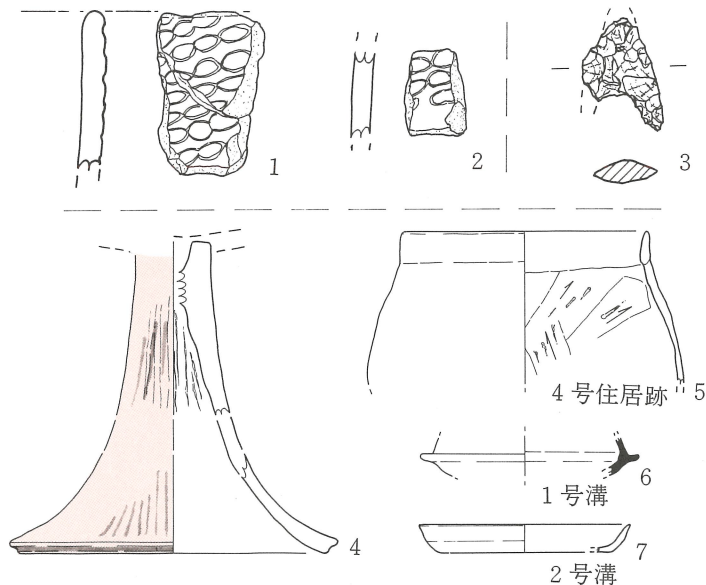
5号住居跡の北側に掘られた4m弱の長さを残す溝であるが、削平を受けたためか浅く流路等は明瞭でない。

8号溝

調査区東端にかかっていた浅い溝で南西から大きくカーブして東に流れる。出土遺物はない。

(5) 出土遺物補遺(第29図, 図版10)

1, 2は1号住居跡埋土から出土した押型文土器であるが異個体である。1は口縁片で、端部はまるくおさめている。外面に楕円形押型文が観察された。胎土には角閃石粒が含まれるが、きめ細かい粘土で、色は明褐色、焼成は良好である。2は胴部の破片である。やはり外面に楕円形押型文がみられる。胎土はやや大型の角閃石粒を含む粗い粘土を使用しており、焼成もや



第32図 柱穴他出土遺物実測図（1，2は1/2，
3は3/4，4～7は1/4）

や軟質である。

3は1号掘立柱建物柱穴3埋土から出土したサヌカイト製の打製の凹基鏃である。長さ19.5mm，幅15.2mm，厚さ4.2mmを測る。表裏面とも雑な調整で，側辺部はふくらみをもつ。現在重量0.7gである。

4は灰褐色粘質土層から出土した高杯脚部で，接合はしなかったものの，同一個体である。筒部にはしほり痕

が残っている。外面は器表が剥落しているものの丹塗りタテ研磨の痕跡を残している。また脚端凹面にはやや黒ずんだ朱が塗られている。胎土は精良な粘土で，色調は淡灰褐色，焼成は良好である。

IV まとめ

今回の発掘調査は短期間かつ小規模なものとなったが，寺浦遺跡のアウトラインは辛じて捕えることができた。当遺跡の起源が縄文時代早期にまで遡りうること，弥生時代から古墳時代にかけては竪穴住居や掘立柱建物によって構成された集落の存在を確認した。

押型文土器の発見は前原町では，本遺跡群に継いで2例めとなった。いずれも小片であり，伴出遺物にも恵まれなかったため多くは語れまいが，その立地において，本遺跡群の場合は沖績平野の段丘上段，寺浦遺跡は小谷の前面テラスであるなど，従来の遺跡の立地観からはずれていることに注視したい。

竪穴住居^{註10}は弥生中期後半が円形から方形プランの住居に移行してゆく過渡期にあたる。東下田遺跡では中期末の円形住居を確認したが当遺跡例はいずれも方形プランを呈する。掘立柱建物は時期の不明確な4号建物を除いて，いずれも柱穴径が50cmを超えており，径の大きな柱をすえたものと思われ，一般住居として建てられたものとは考え難く高床倉庫跡を想定するのが

妥当と考える。貯蔵穴と掘立柱建物の先後関係については出土遺物の量が少なく速断しかねるが、甕の口縁形態を比較すると若干貯蔵穴が時期を遡り、掘立柱建物に先行する可能性がある。

今後、寺浦遺跡における集落の構造、周辺の同時代遺跡との相互関連についての分析等、今報告において検出するに至らなかった分野について、なお一層掘り下げた考察の必要性のあることを痛感した。

- 註1 『福岡県遺跡等分布地図（糸島郡編） 福岡県教育委員会 1981
- 註2 川村 博 「昭和57年度埋蔵文化財発掘調査概要」 前原町教育委員会 1983
副島邦弘 「篠原新建遺跡」 前原町教育委員会
川村 博 「篠原新建遺跡」Ⅲ 前原町教育委員会 1984
- 註3 川村 博 「伏龍遺跡」 前原町教育委員会 1981
川村 博 「井原遺跡群」 前原町教育委員会 1982
- 註4 原田大六 「伊都国王墓展」 図録 夕刊フクニテ新聞社 1969
- 註5 渡辺正気 「福岡県糸島群旧糸島高等女学校校庭出土の甕棺」 『史淵』81 1960
- 註6 力武卓治 飛高憲雄 「席田遺跡群・久保園遺跡」 福岡市教育委員会 1983
- 註7 栗山伸司 「辻田西遺跡」 北九州市教育文化事業団 1986
- 註8 栗山伸司 「守恒遺跡」 北九州市教育文化事業団 1986
- 註9 谷口俊治 「北方遺跡」 北九州市教育文化事業団 1986
- 註10 従来からの押型文土器文化期の遺跡立地観への警鐘は既に山崎純男氏が、「福岡市柏原遺跡群」Ⅰ（福岡市教育委員会 1983）で述べているが、本町においても同様な状況を呈しているようである。

付 載

前原町向原遺跡出土遺物について

前原地区内には、多くの文化財包蔵地が確認されているが、中でも向原遺跡は弥生～古墳時代の墳墓群が密集する地点として以前から注視されてきた。しかし正式な発掘調査およびその報告となると、渡辺正気氏が「史淵」第81集「福岡県糸島郡旧糸島高等女学校校庭出土の甕棺」^{註1}の中で、2基の甕棺墓の発掘調査報告と、当時の聞き込み調査による周囲の文化財分布状況調査結果等が報告されているに過ぎず、他に原田大六氏^{註2}、柳田康雄氏^{註3}、石山勲氏^{註4}による出土遺物の紹介、分析が散見されるのみである。

本項では、前掲の渡辺氏の報告をもとに、現在伊都歴史資料館で展示している同遺跡出土の甕棺、素環頭大刀の資料を提示する。

1. 遺跡の立地

向原遺跡は糸島郡前原町大字前原東区を中心とする一帯に所在する遺跡群である。遺跡は雷山山系から続く起伏の著しい丘陵の北裾に位置している。現在では小学校建設や都市の再開発事業等による造成工事のため、昔の面影はまったく残っていないが、以前は幅130m程の北へ長く伸びた舌状台地であったということである。標高は10m前後に達し眼下には加布里湾から今津湾に続く糸島低地帯が広がっている。この糸島低地帯は弥生～古墳時代には加布里湾が現在より深く東に入り込んでいたらしく、浅い渦状の内湾であったと考えられる。遺跡名については旧字を向原^{むかえばる}と呼称していたため向原遺跡、あるいは当地を包括する行政区名をとって上町^{かみまち}遺跡と称していたようである。



第33図 向原遺跡および周辺遺跡位置図（昭和59年頃）
(1/5,000)

2. 遺跡破壊の経過

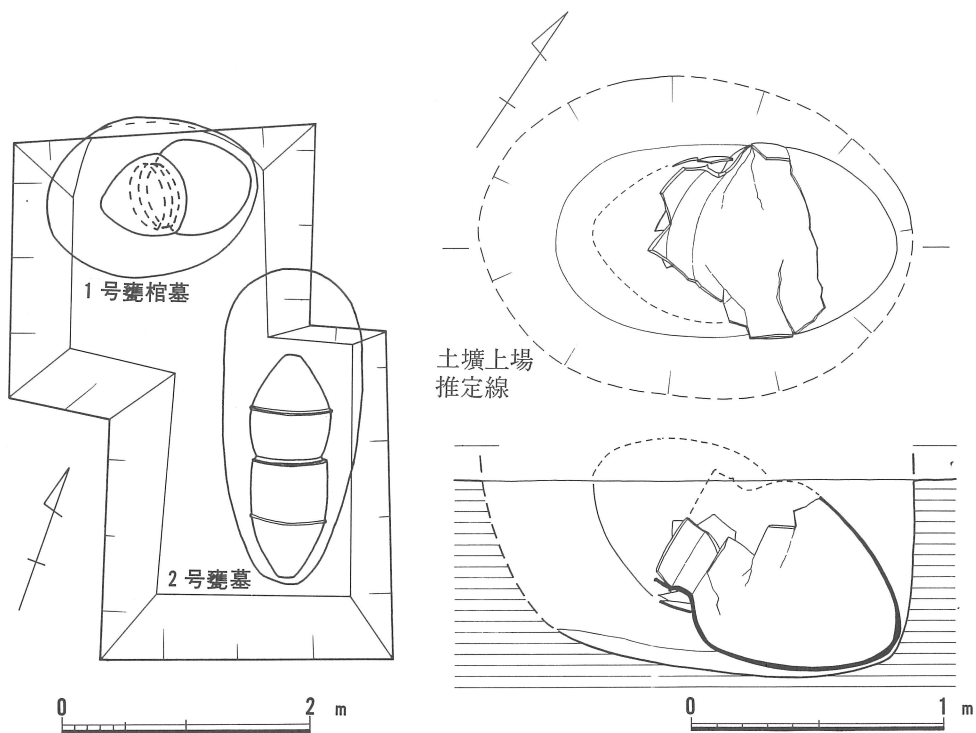
遺跡の大要は、前掲報告に詳しいが、当該台地における数度の大規模な造成事業によって、弥生時代～古墳時代の墳墓群が破壊されている。下記のとおり時間の経過に従ってその概要を整理してみた。(文頭番号①～④は第33図内遺跡地点番号に一致する。)

①昭和15年前後、旧糸島高等女学校の運動場工事中に50余個の甕棺が出土したらしいが、その処置について明らかでない。

②昭和32年9月27～28日、旧糸島高等女学校北棟校舎の中央部直下にあった箱式石棺墓が破壊される。大形の箱式石棺で棺内全面に赤色彩料が塗られていた。現在、蓋石は前原町の料亭『丸一』の石標に、側石は前原町浦志在住の檜崎包吉氏宅の門柱石として使用されている。大形の素環頭大刀一振り石棺の西側壁外に棺外副葬されていたということである。

③昭和32年10月2日、旧奉安殿の西側8～9mの地点から2基の甕棺墓が出土し、渡辺氏らによって発掘調査が行なわれた。一方は弥生中期中葉、他は古墳時代前期のいずれも合口式甕棺である。

④昭和60年5月、前原町立伊都文化会館建設に伴う甕壁工事に先立ち前原町教育委員会が調査を実施した。丘陵東側傾斜地から甕棺墓16基、木棺墓8基、石蓋土壇墓1基、土壇14基、防



第34図 向原遺跡甕棺墓出土状況図(右1/60)と1号甕棺墓出土状況復元図(左1/30)
(いずれも渡辺正気氏前掲報告図からトレスして作成)



第35図 向原遺跡出土遺物実測図 (1/6)

空濠1基を検出し、③の調査地点出土甕棺と同一グループに属するものと思われる。なお、調査区造成土中から、一括廃棄された甕棺片が発見された。パンコンテナ50箱分におよぶものであるが、廃棄された要因、状況は明らかではない。

3. 出土遺物について

第1号甕棺墓(第33図)

調査の経緯は、前掲③による。

渡辺氏の報告によれば、長径1.70m、短径1.30m、深さ0.8m+ α の長楕円形土壙中に、主軸をW-31°-Sに向け31°の傾斜角をもって埋置されていた合口式の壺棺であったという。下甕は二重口縁甕、上甕は口縁を打ち欠いているため、確証はないが、やや小形の同種甕を用いたものであろうと報告されている。上甕の所在は、現在明らかではない。

同系の甕棺は三雲八反田遺跡1-1地区で出土している。

註5

甕棺下甕(第34図-1, 図版11)

下甕は器高99.6cm、口径56.5cm、胴部最大径73.2cmの二重口縁超大形甕である。やや丸みをもつただらかな平底の底部をもち、胴部は肩の大きく張り下半に細長く続く卵形の長胴形を呈している。頸部は短くあまりしまらずに口縁屈曲部に続く。三角突帯を張りつけたような外方にむけた張り出しを持つ屈曲部からほぼ直立し、口縁部は上端で再び外への張り出しを設ける。口唇部は若干外傾した平端面に仕上げられている。器面調整は、器表の剥落が著しいため不明瞭な部位もあるが口縁部にヨコナデ調整が行なわれ、外面は肩の部位のみヨコハケが施される以外はタテ方向のハケが行なわれている。内面はヘラケズリ調整で仕上げられている。

素環頭大刀(第35図-2, 図版11)

資料の出土経緯は、前掲②による。

資料は所々に欠損部があり、復元加工が施してある(実測図アミカケ部)ため、正確な値は明らかでないが現長は119.5cm、環頭部外径8.2cm、内径5.8cm×4.6cmを計る。柄と身の境は明瞭ではなく身部には一部木質が付着している。木製鞘に収められていたものと思われる。

身部の長さが長く、かつ環頭基部の構造が共づくりであることから4世紀後半～5世紀の資料である可能性が高い。

註1. 渡辺正気「福岡県糸島郡旧糸島高等女学校校庭出土の甕棺」『史淵』 81 1960

註2. 原田氏が伊都国王墓展図録42ページに糸島郡前原町上町の弥生後期支石墓(大形箱式石棺墓 筆者註)から素環頭大刀が出土したことを報告している。

註3 柳田康雄 糸島地方の弥生遺物拾遺 「九州考古学」 第58号 九州考古会

註4 石山 勲「福岡県久留米市所在祇園山・七曲山古墳群の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXVII福岡県教育委員会 1979

註5 柳田康雄・小池史哲『三雲遺跡』III 福岡県教育委員会 1982

圖 版



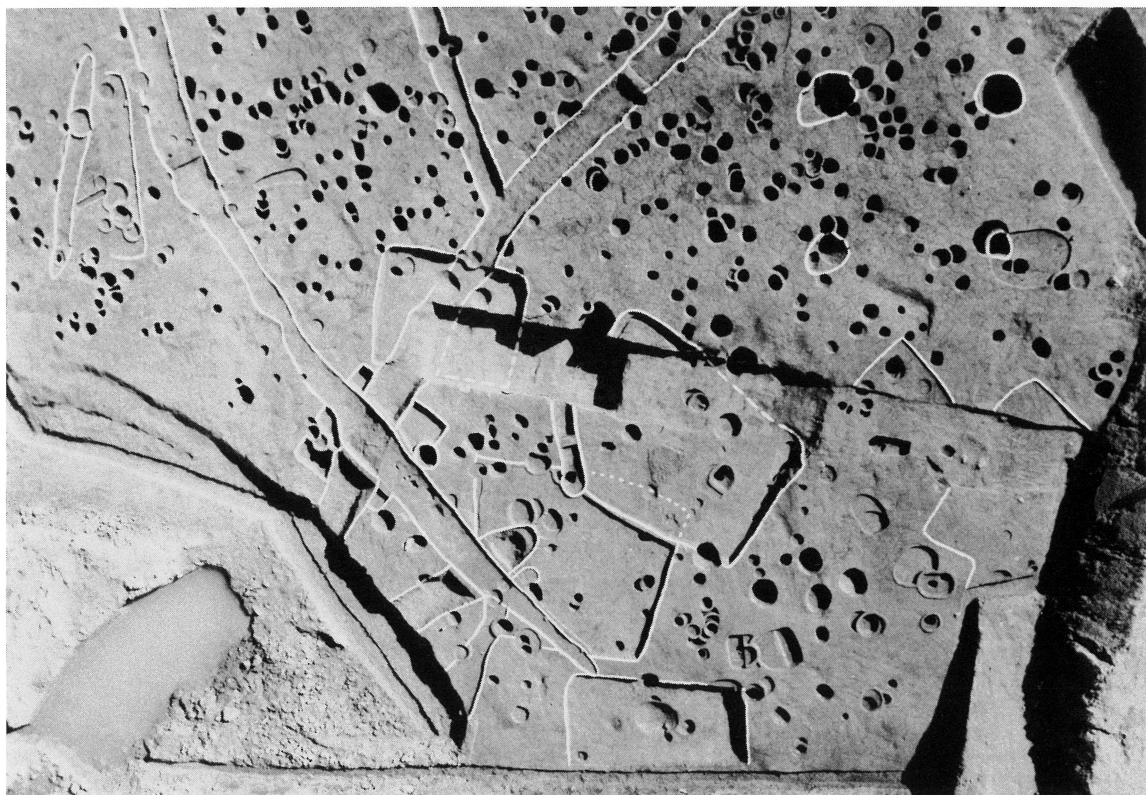
a. 寺浦遺跡調査区全景（上から）



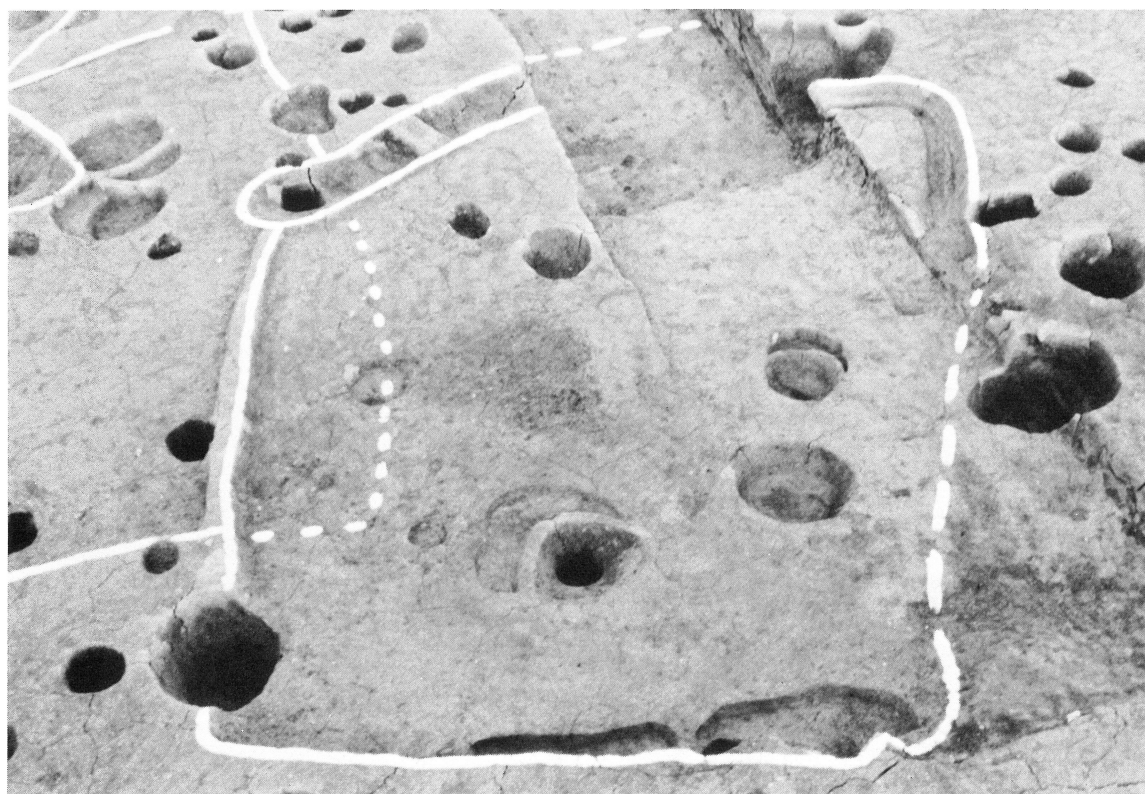
b. 同上（北東から）



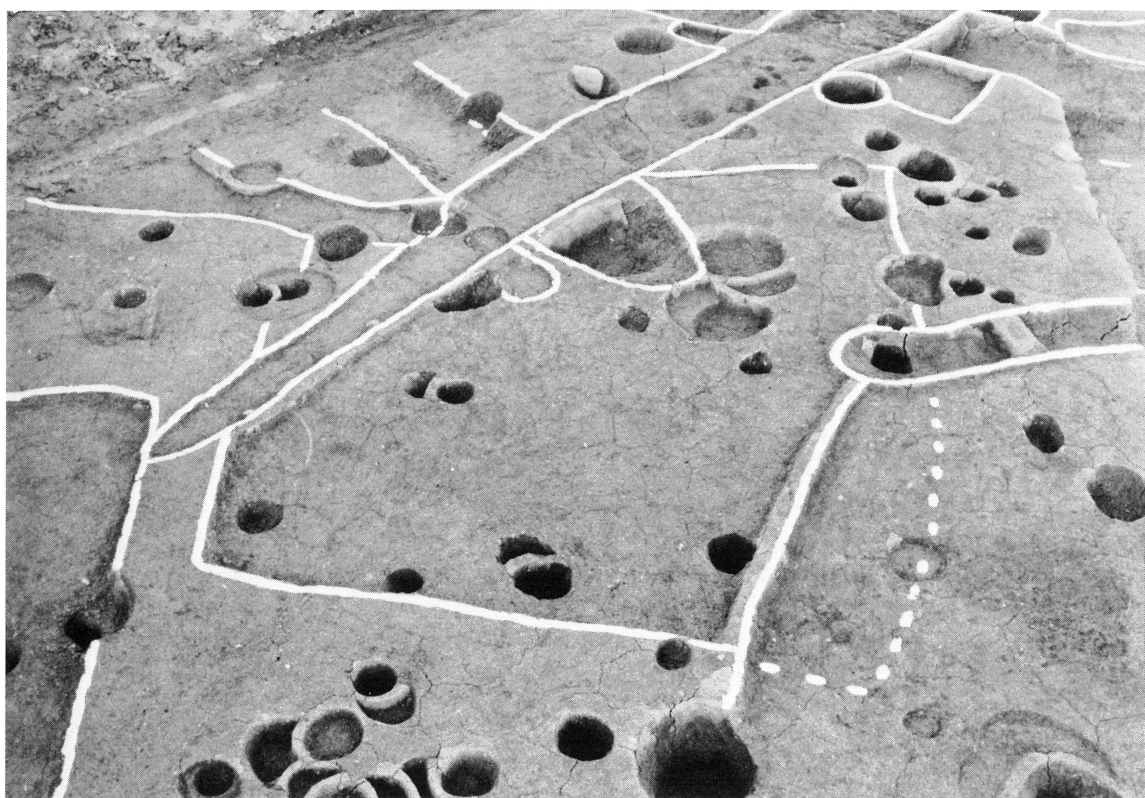
a. 寺浦遺跡調査区近景（上から）



b. 調査区北側近景（上から）



a. 1号住居跡



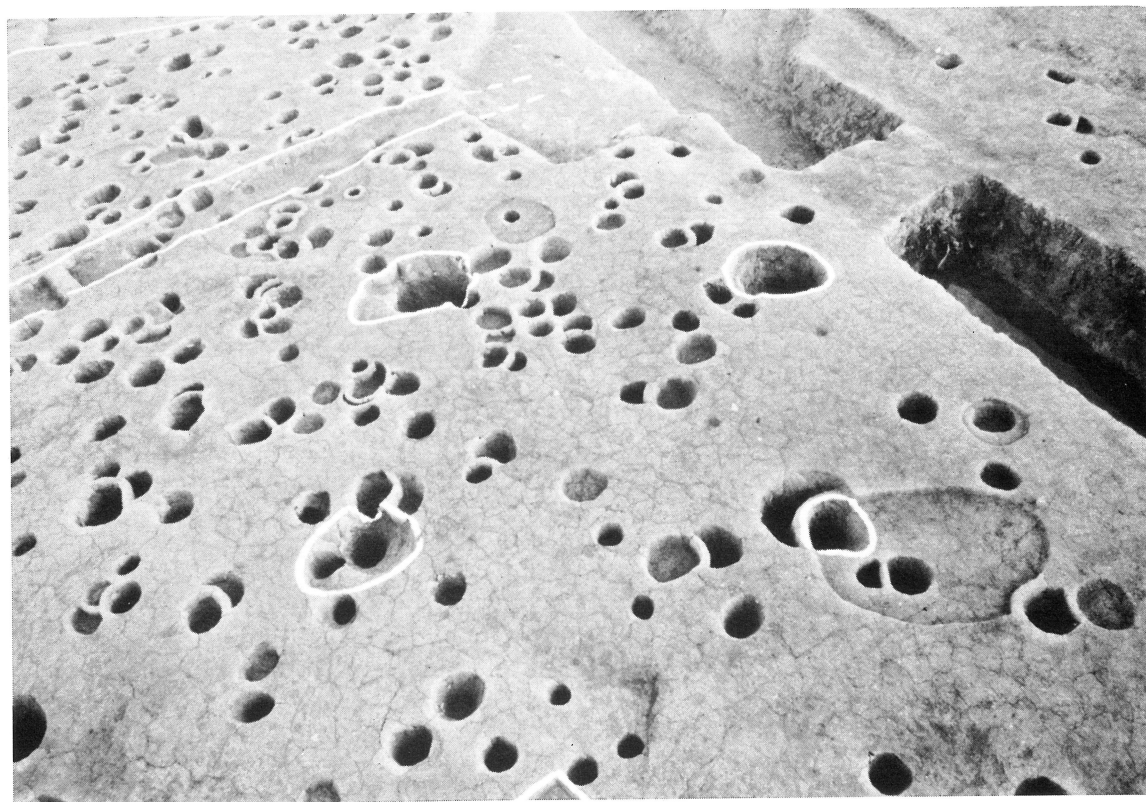
b. 2号住居跡



a. 3号住居跡



b. 4号住居跡



a. 1号掘立柱建物



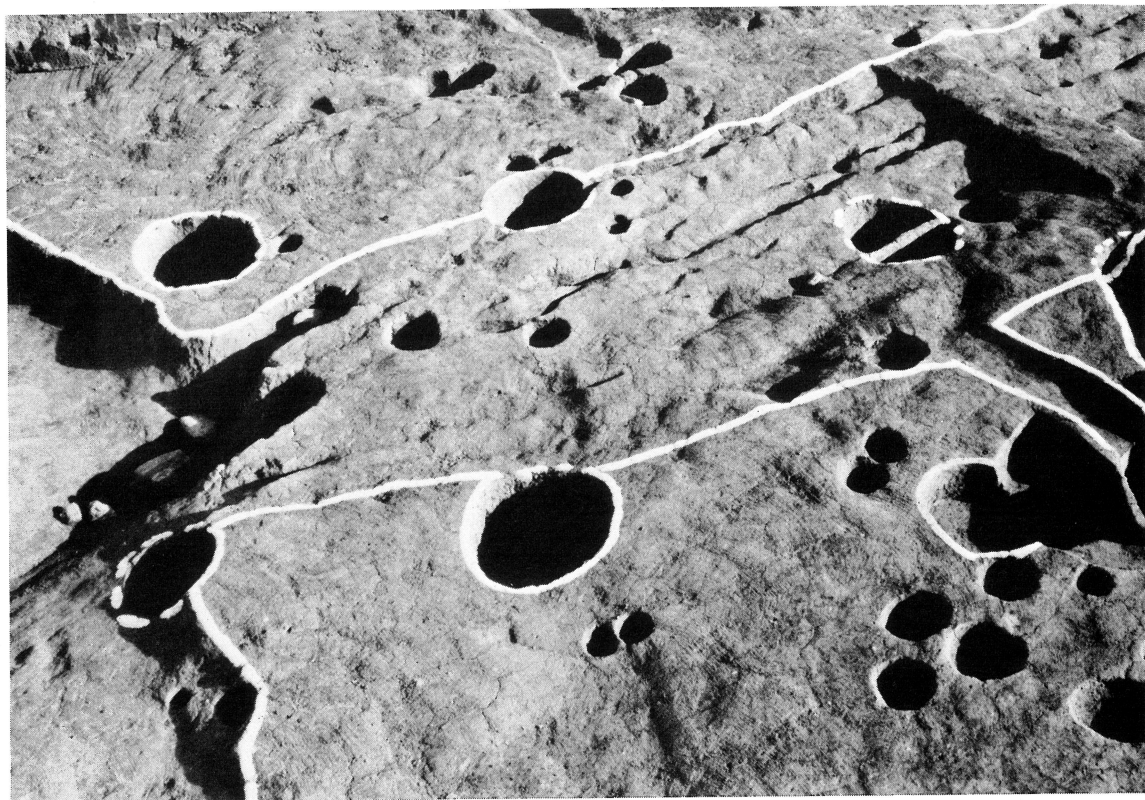
b. 1号掘立柱建物柱穴内土器出土状况(柱穴1)



a. 1号掘立柱建物柱穴内土器出土状况(柱穴4)



b. 柱穴55土器出土状况



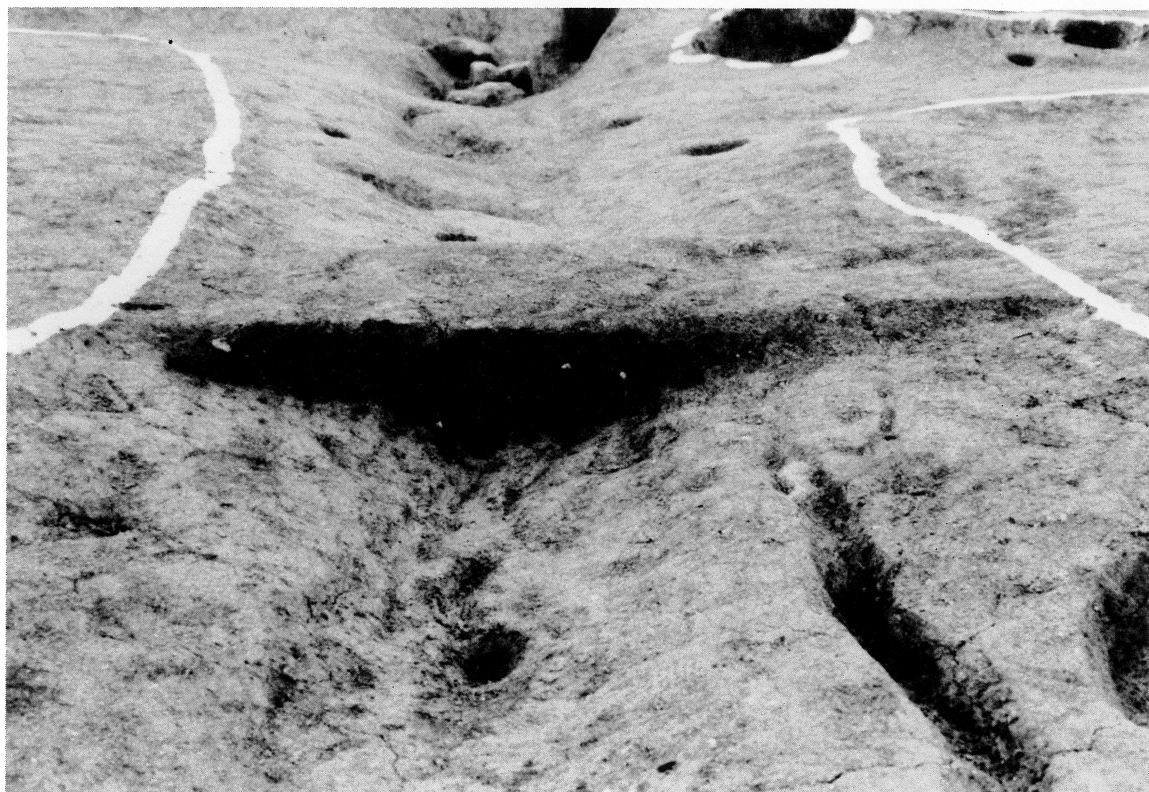
a. 2号掘立柱建物（北から）



b. 2号掘立柱建物土壙土器出土状況（北から）



a. 溝1



b. 溝1土層断面



1 掘—25



1 掘—20



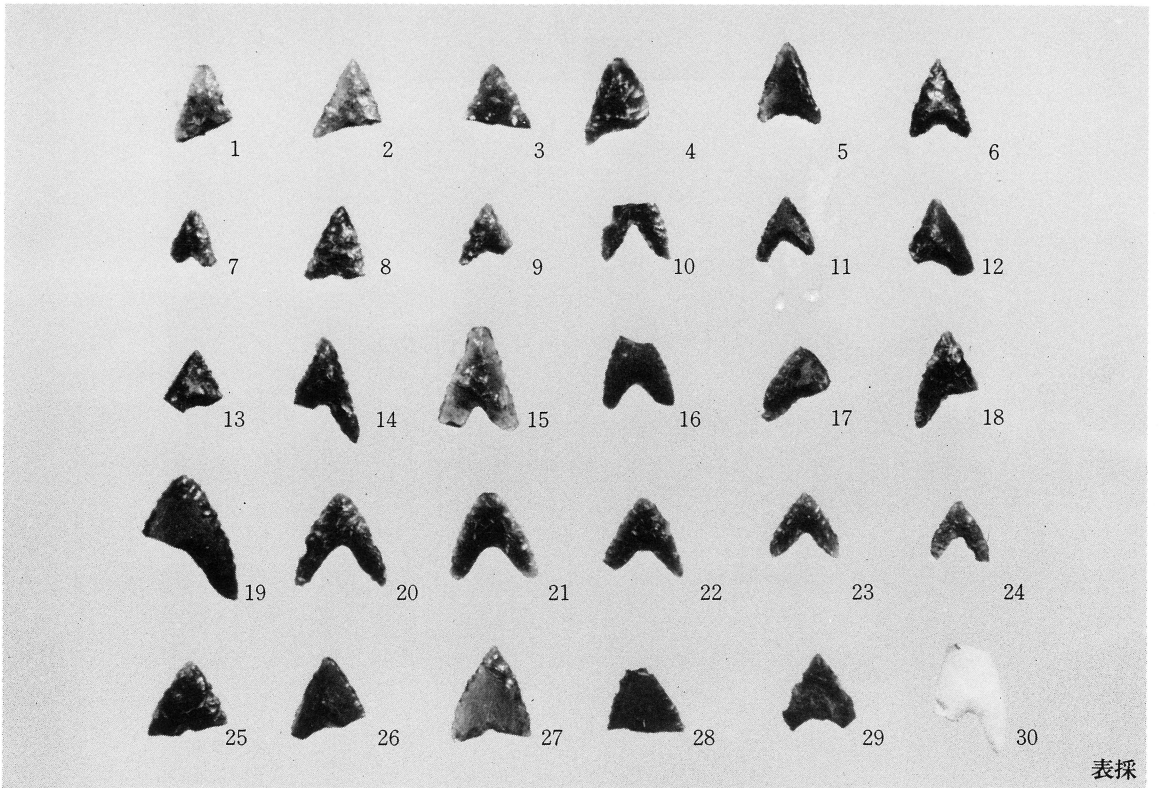
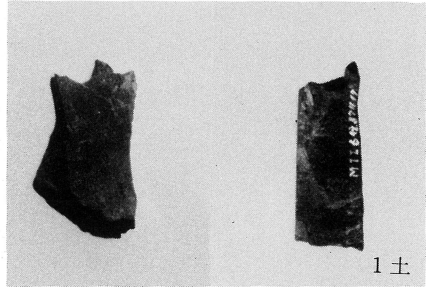
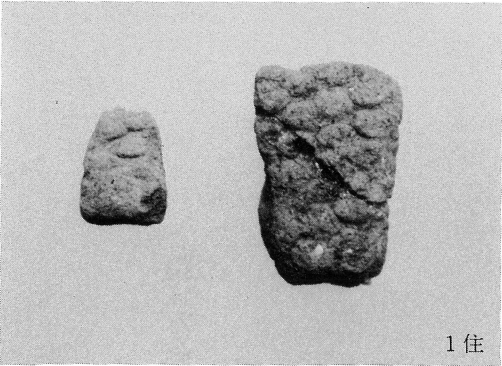
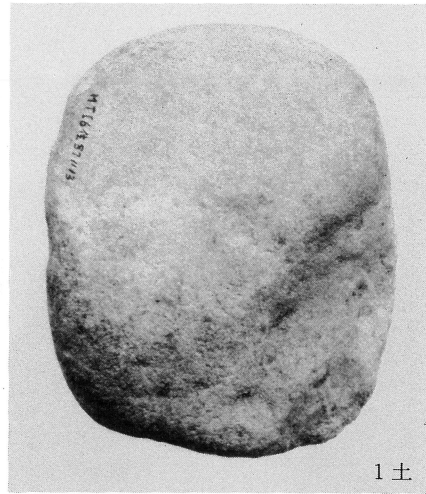
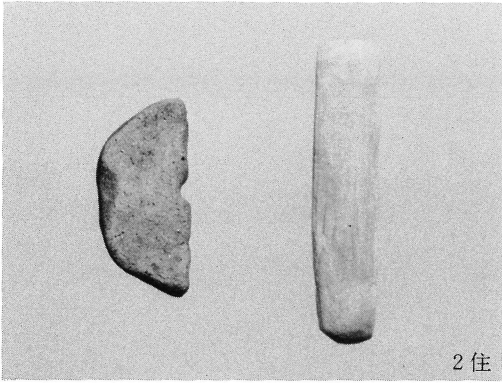
1 掘—17

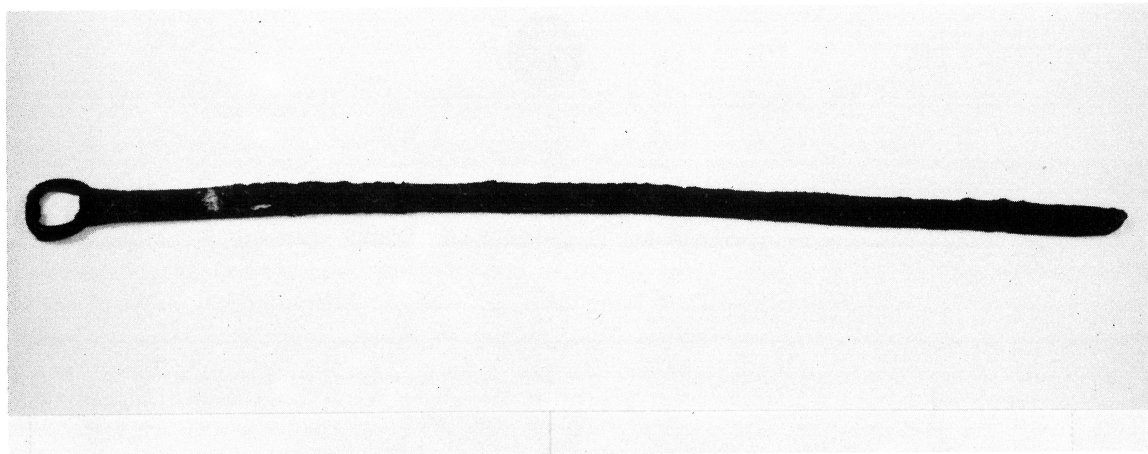


柱穴55—29

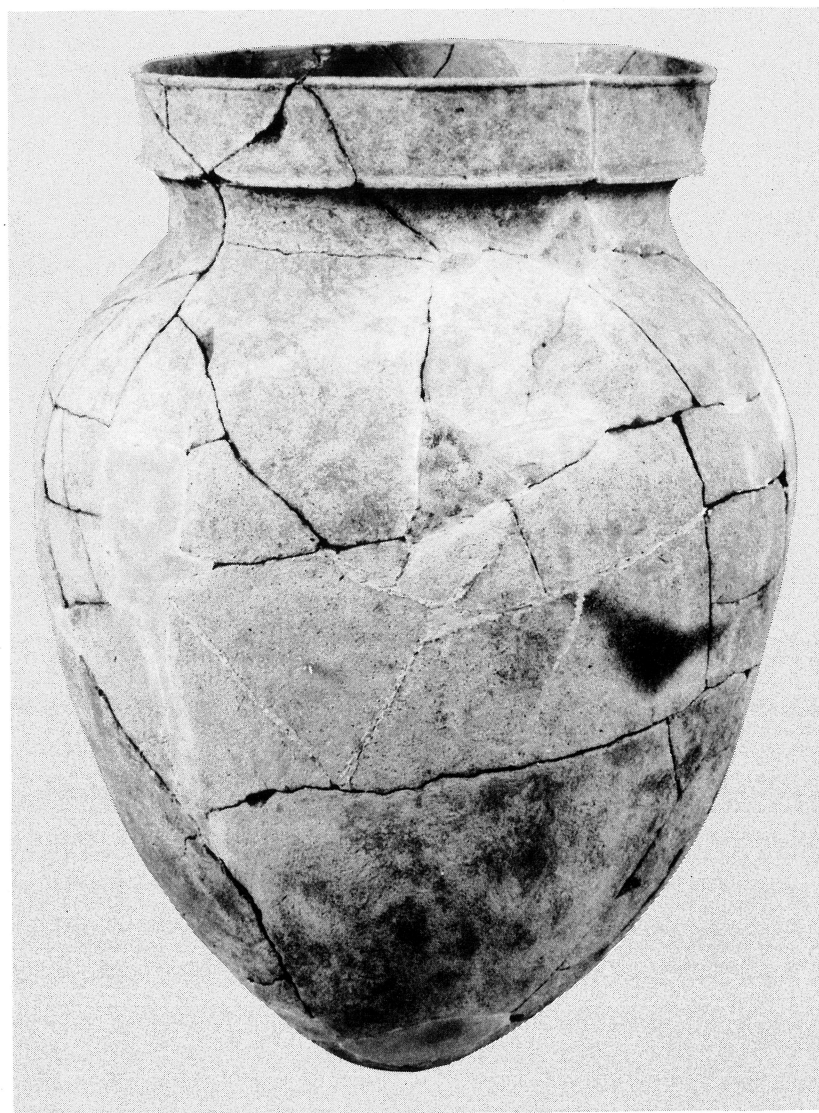


柱穴55—30





a. 向原遺跡出土素環頭大刀



b. 向原遺跡出土土師器甕棺





付図 寺浦遺跡調査地区遺構配置図 (1/100)

前原地区遺跡群

I

前原町文化財調査報告書 第28集

発 行 前原町教育委員会
福岡県糸島郡前原町大字前原623番地

印 刷 赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号

